



ごあいさつ

白幡同窓会会長 齋藤 佳郎



白幡同窓会会員の皆様には
ますますご清祥にてご活躍の
こととお慶び申し上げます。
平素本会並びに母校発展の
ため深いご理解と温かいご支
援を賜り心から感謝申し上げ
ます。

四月六日(土)、母校体育
館で開催された総会にて役員
改選が審議され、再度会長を
継続することとなりました。
今後とも会員の皆様のご指導
ご鞭撻の程よろしくお願い申
し上げます。

総会は昨年度から体育館で
行うこととし、後輩たちの活
動の一環を参観できるよう吹
奏楽部の演奏等をお願いして
おります。本年度は吹奏楽演
奏、応援団及びチアリーダー
による先輩たちへの熱いエー
ルを受けて、出席者一同深い
感動を覚え、母校愛を一層深
めました。

本会は会員相互の親睦と母
校への支援を目的に運営して
おりますが、総会出席者が増
えるとともに各卒業回の同窓

竜ヶ崎第一高等学校内
白幡同窓会事務局
〒301-0844 龍ヶ崎市平畑248
TEL 0297-62-2146
FAX 0297-62-9830
ホームページアドレス
<http://www.ryugasak1-hed.jp/>
白幡同窓会からのお知らせ
印刷所 倉沢印刷
題字 秋山海堂

会も多く見られることは大変
喜ばしいことです。
同窓会運営の原資は新卒業
生の「同窓会入会金」及び会
報をお届けする際にお願いま
す。皆様の母校愛と本
会運営に対するご理解により、
昨年度は十分な協力を頂き
ました。役員一同安堵するこ
とも、責任の重さを感じる
次第です。

昨年度皆様のご承認を得て
スタートした校外幹事会は大
野英二(高校十一回)幹事長
を中心に校内幹事との連携を
より密にし、会報の充実等に
向けて精力的に取り組んでお
ります。

会報は会員同士の心の交流
を広げる大切なメディアであ
ると信じます。
前号で「青木常雄先生(旧
制中学第一回卒)」、「故浜田
雅三展」壁に夢を託した男」
「竜一コレクションを終えて」
「同窓会だより」、「母校の想
い出」等に寄稿してください
た方々の労いに対し改めて感謝
申し上げます。

この会報を切っ掛けに、思
いがけなく嘗ての上司、現太
田一高同窓会会長の中村洋一
氏にお会いする機会を得まし
た。東京高等師範一年のとき、

申し上げますとともに、皆様の
ご多幸と母校の発展をご祈念
します。

竜ヶ崎一高の新しい流れ

国際交流の推進について

学校長 黒沢 宣明



白幡同窓会の皆様には、本
校の教育活動に日頃より様々
なご支援ご協力を賜り、深く
感謝申し上げます。今年度は
同窓会の皆様から科学研究振
興費のご支援を賜りましたが、
さらに今年度の七月には新しい
応援団旗(大応援旗一、小応
援旗二)を寄贈していただき
ました。これまでの応援団旗
は、一九八〇年の創立八〇周
年の際に、やはり同窓会から
寄贈していただいたもので、
三十三年間本校のシンボルと
して野球応援その他の学校行
事の際に掲げられてきました。
この度新調していただき、七
月四日に齋藤同窓会長ご臨席
のもと贈呈式及び披露式を執
り行い、七月九日の夏の高校
野球茨城県大会全校応援の際
には青く晴れ渡った炎天の球
場に翻りました。この日の野
球応援は「応援大賞」を受賞
し朝日新聞社から表彰され、
応援団やチアリーダーにとつ
て大きな励みになりました。

応援団旗を仰ぎ見れば、自然
と熱い思いがこみ上げてきま
す。これからも大空に翻り生
徒たちの心を鼓舞してくれる
に違いないと信じています。大
切に使わせていただきます。あ
りがとうございました。

さて、本校がこれから特に
力を入れていきたい重要な柱
の一つに、プレゼンテーション
能力の育成と国際交流の推
進があります。今年度の三月二
十三日につくばの国際会議場
で、ノーベル賞受賞者の江崎
玲於奈博士を始め四人の大学
教授を審査員として「つくば
Science Edge 2013」という
科学のプレゼンテーション大
会が行われました。本校も予
選を優秀な成績で通過し、全
国から選ばれた八チームに入
り、大いに健闘しました。し
かし、たいへんレベルの高い
大会で、他県の高校一・二年
生がまさにNHK・Eテレの
「スーパープレゼンテーション」
を見ていたようなプレゼン
を堂々と行っていました。
それは本校生にとってもたい
へん刺激的で、大いに奮起さ
せられるものであったろうと
思います。また、十二月には
茨城大学で国際学生会議が開
催され、東南アジアなど外国
の学生も多数参加して、英語
によるプレゼンテーション大
会が行われました。本校から
も二チームがプレゼンを行い、
また四〇名の生徒が参加いた
しました。同じ高校生がここ
までやれるのか、ここまです
ごいのかという、想像を超え
た別次元の体験をすることは、
生徒が成長する素晴らしい機
会です。このような発表表
会に生徒たちをどんどん参加
させたいと考えております。
国際交流では、昨年度ユネ

スコ主催のキズナ強化プロジェ
クトに本校が選ばれて、二
十四名の生徒をカナダに二週
間派遣しました。また、ニュ
ージーランドのウエズレー高校
からの訪問団のホームステイ
を受け入れ、一・二年生によ
る交流会を開きました。これ
らは生徒の心を揺さぶる、た
いへん貴重な体験になりました
が、今後さらに、国際交流
を推進するために、現一年生
については、マレーシアへの
海外修学旅行を実施する予定
です。マレーシアの高校との
学校間交流やマレーシアに進
出している日本企業(味の素・
ヤクルト・ソニーなど)を訪
問し、海外で働くというのは
どういうことなのかを実際に
見聞してくるということを見
画しております。

私は、別の学校でマレーシ
アへの修学旅行を実施した経
験がありますが、海外修学旅
行は、将来海外で暮らしたり
働いたりするための常識やマ
ナー、異文化にどう対応した
らいいか、などを学ぶ絶好の
機会となります。現地では英
語を実際に使えなければ十分
に行動できないということ、
事前の英語学習に対する意気
込みも違ってくると思います。
旅行中、見るもの聞くものすべて新鮮
という感動はもちろん、事前
学習においても相当効果があ
ります。最近文科省からTO
EFL対策や理科・数学を英
語で教える取り組みなどを支
援する「スーパーグローバル
ハイスクール」構想がうた
だされましたが、本校に海外
修学旅行や海外派遣、海外外
からの受入れなどの国際交流
をぜひ定着させたいと考えてお
ります。

本校は、常に時代の先頭に
立つて新しい時代を切り拓い
ていく革新(イノベーション)
の気概をもった生徒の育成に
尽力してまいりますので、今
後とも同窓会の皆様方の温か
いご理解とご支援を賜ります
よう、どうぞよろしくお願い
申し上げます。

平成二十五年度
総会報告
平成二十五年度の白幡同窓
会が四月六日に本校体育館で
開催されました。開式の言葉
に続いて、応援団とチアリー
ダーがリードする校歌と応援
歌の斉唱の後に、昨年に引き
続き吹奏楽部による演奏の披
露がありました。出席者はア
イガーデン下平での懇親会を
含めて百十八名でした。今年
度の招待学年は高校三十一回、
四十六回と定時制二十七回、
四十二回でした。
審議・報告事項は次の通り
です。

- 一 平成二十四年度事業・決
算報告
- 二 平成二十四年度会計監査
報告
- 三 役員改選(下記参照)
- 四 平成二十五年度事業・予
算案
- 五 学校現況報告

※一、四の事項については、
学校ホームページの「白幡
同窓会からのお知らせ」に
詳細を掲載しています。



校歌斉唱

【本部役員】
会長 齋藤 佳郎(高8)
副会長 片山善一郎(高2)
副会長 横須賀英明(高10)
副会長 染谷 信洋(高15)
監事 関口 広行(高26)
監事 山田 實(高26)
顧問 蓮沼 節哉(高35)
顧問 野口武太郎(高40)

【校外幹事】
幹事長 大野 英二(高11)
副幹事長 小嶋 豊(高10)
宮本 正俊(高10)
木野内昭治(高13)
小倉 培夫(高20)
服部 俊夫(高25)
篠塚 文男(高28)
大和佐知雄(高28)
横田 久(高28)
櫻井 篤美(高29)
大野 雅之(高30)
福田 道義(高31)
山崎 睦(高31)
吉田 宜浩(高31)

平成二十六年度 総会の案内

平成二十六年度の総会
は四月五日(土)に本校体
育館にて開催予定です。今
回ご案内の往復乗車を差
し上げるのは、各卒業回の
幹事の方々と、招待学年の
高校三十二回・四十七回・
五十七回及び定時制二十
八回・四十三回・五十三
回の卒業生全員です。お
誘い合わせの上、多数の同
窓生の参加をお待ちして
います。

なお、招待学年の出席者
の方には、陶芸家・植竹敏
氏(高27回)作製のオリジ
ナル「校章入りの白萩釉鍋
湯呑」を記念品として贈呈
いたします。
総会終了後には、例年通
り懇親会を本校下のアイ
ガーデン下平で開催する
予定です。

同窓会

だより

高校第八回

齋藤 佳郎

私たちはここ数年三年おきに同窓会を開いています。毎回二十余名の幹事による入念な準備のもと当日を迎えるのも楽しみのひとつです。

今回は江戸崎在住の森永俊幸氏が幹事代表となり五月十八日（土）、龍ヶ崎の喜仙を会場に開催しました。

恩師である蓮沼節哉先生、齋藤邦彦先生、井坂弘文先生のご臨席をいただき、同期生も遠くは福岡市、宇都宮市から参加し、総勢四十五名の和やかな集いでした。

開会に先立ち、恩師、山口秋彦先生、上野錦一先生および同期の物故者の冥福を祈り黙祷を捧げました。

その方々と語れないことが極めて残念です。

森永幹事代表の挨拶の後、女性の方々から三先生方に記念品の贈呈、そして三先生から当時を偲ぶお話しがあり、大変お元気な様子にまるで白幡台の教室で授業を受けているような気分でした。喜寿を迎えようとしている私たちが同窓会での気分は高校生です。

すでに卒業をお迎えの蓮沼先生から出席者全員に対して表紙に先生のお歌を記したクリアファイルを贈られ大喜び。先生のお歌は、有り難や半寿過ぎての日常に本も読めるし酒も飲めるし恩師を囲み、また同期生同



士輪になって、懐かしい話に花が咲き、楽しい時間はあっという間に過ぎ、恒例の肩を組み校歌斉唱で中締め。

同会場別室で開かれた二次会にも半数以上が集まり名残を惜しむ一日でした。

最終幹事会において次回は卒業後六十年を記念して、二千十六年五月開催にまわりました。蓮沼先生、齋藤先生、井坂先生、そして八回生の皆さん、二千十六年の再会をお楽しみに！



高校第十三回

樋口（旧姓 土屋）孝之

前回の同窓会から十六年ぶり、卒業時から五十三年。古稀の祝いを兼ねての同窓会をアイガーデン下平で行いました。卒業時の在籍数が二百六十二名、当日の出席者が六十二名。集合時間三十分前には遠くは岐阜県からも含めて全員が揃うという気合の入った

開会でした。出席予定の蓮沼先生は急遽の欠席になりましたが、野口先生、齋藤先生、石神先生並びに事務でお世話になった菅谷さん（現、尾形さん）の出席を賜り、ひとことずつのお言葉を頂戴し、懐かしさが身にしみました。

残念なことですが、物故者は三十七名。全員で黙祷をしました。五十三年ぶりに顔を合わせた友も多く、最初は名前と顔が一致せず戸惑った雰囲気もありましたが、話が進むうちにあんなことがあったよな、こんなこともあったよな、と高校時代の思い出がフラッシュバックされ、大変楽しい時を過ごせました。

ご案内の返信ハガキにより、欠席された先生方の近況、更には出席できなかった友のいくつかの近況が披露され、皆元気で生活を楽しんでいる様子がわかり、安心しました。参加者のうち、数人のスピーチがあった後、趣味として日ごろ楽しんでいる民謡、尺八、さらにカラオケによる歌の披露等もあり、最後まで、ワイワイと楽しめました。

終りは全員で校歌の合唱。大きな声が響き渡りました。閉会後、去りがたい友も多く、その場で二次会、更には三次会と続きました。口々に次回の同窓会の開催を希望する声があり、宿題となりました。

この会を通じて古稀を迎えてもまだ皆



竜ヶ崎一高 昭和36年(13回)卒業生同窓会

が元気で、各自が「楽しく生きる」ことに対し、いろいろな工夫と努力していると強く感じました。

高校第三十一回

三石 仁

平成二十五年四月六日（土）白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

当日は、体育館での白幡同窓会総会にも出席させていただきました。白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

白幡同窓会総会に招待されたことを機に、第三十一回卒業生の同窓会が開催されました。

を報告しあうと、しだいに部活動やクラスの思い出話に、しばしば三十五年前の昔に戻り、当時の懐かしい思い出に浸ることができました。そして、心がはるばる貴重な時間を過ごすことができました。

最後に、今回の同窓会の開催に当たってご出席くださいました恩師の方々、いろいろな準備をしてくださった幹事の方々、ありがとうございました。



常陽銀行白幡会

高三十一回卒 片平 正夫

「千秋の雪積りたる、はい」幹事若手の掛け声に続いて出席者全員が校歌を歌うところから、常陽白幡会の総会はスタートします。歌うのは一番と五番。卒業して何年経っても、歌詞を見て歌うような愛校心の無いものは、一人もおりません（実は個人的には、最後の小節「忠良有為の基たてん」がすんなり出てこないのです）。

読んで字の如く、常陽白幡会は竜ヶ崎第一高等学校を卒業した常陽銀行行員が集う会です。

同窓会？確かに同窓会ですが、年齢的には新入行員から九十歳を超えた方までが会員

のため、同期同士の同窓会とは雰囲気は少し違います。こういう雰囲気かと申しますと、個人的には親子や親戚が集まったような、アットホームな会だと思っております。

常陽銀行の中には、高校や大学の同窓会組織が多数存在していますが、常陽白幡会はその中で、決して大きな組織ではありません。

銀行は転勤が多く、長くとも四年も経てば新任地に赴任します。転勤は何度しても慣れるものではなく、いつも不安な気持ちで一杯です。そんな時、白幡会のメンバーがその支店に居てくれたら安心です。年上、年下に関わらず、色々なことを教えてくれる心強い先輩となります。

総会は年に一度。大洗の銀行保養所一泊と龍ヶ崎日帰り（松泉閣）を交代で行っています。

集まれば、恩師の話、友人や部活の話と、時間はあっという間に過ぎてしまいきます。ゆっくり話が出来るようにと、二年に一度は一泊でゆっくりと時間を過ごします（日帰りのときは松泉閣だけでは名残惜しく、夜まで二次会、三次会と続けてしまいがちです）。

昭和三十六年頃二十名足らずでスタートした当会も、今年会員が百名の大会に乗りました。OBの方が三十一名、現役が六十九名。内平成入行が五十九名と平成組が増え、これからは、若手とベテランの融合に少し

気を使っていかなければと感じ

ています。この便りを読んだ常陽白幡会幽霊会員の皆様、次回のご参加を心待ちにしています。



筑波銀行白幡会

高四十一回卒 佐々木 隆

私達は株式会社筑波銀行に勤務する竜ヶ崎第一高等学校卒業生を対象とした行内同窓会として、高十九回卒から高六十一回卒までの幅広い年代の会員からなる同窓会です。筑波銀行は、平成二十二年三月に関東つくば銀行と茨城銀行が合併し誕生した銀行です。合併を機に竜一高卒業生が相当数に上ったことから、行内同窓会を組織し「筑波銀行白幡会」と称して例会を年一回開催しています。今年には平成二十五年七月二十一日に土浦市内「よし町」にて開催いたしました。

今年の例会は二十四名が参加し、近況報告や高校時代の思い出話、仕事上のアドバイスのシーンが多く見られ、竜一高卒業生としての結びつきを深める貴重な場となりました。平成二十二年に筑波銀行が誕生したこと、また、近年大

学生の就職に関して地元・地方志向の傾向が増加したこと

も相まって、ここ数年は毎年数名の竜一高卒業生が筑波銀行に入行しています。これから多くの竜一高卒業生が筑波銀行に入行し、今後さらに「筑波銀行白幡会」が隆盛となるよう会員一同祈念しています。

なお、今回の例会に際し、竜一高倉持教頭先生より創立百周年記念誌「星霜百年白幡台」をはじめ各種資料をご提供いただきました。参加者それぞれ竜一高在学時を振り返る大変貴重な資料となり、会の盛り上がり大いに役立ちました。ご協力ありがとうございました。



剣道部OB会

高二十回會長 小倉 培夫

猛暑の八月十一日（日）毎年恒例となっております剣道部OB会を開催しました。今年度は土浦一、土浦三、土浦工業との合同稽古・懇親会を合わせて実施しました。合同稽古には竜ヶ崎剣友会を始め、近隣の剣友・中学生、小学生、一〇〇名の多数参加いただきました。

中学生の試合練習を八時、本校剣道OB会の総会九時三十分、現高校剣道部へ激励費の贈呈、四高校OB会を十時より開始しました。開会式では各高校の代表から挨拶を頂

き



き合同稽古と進めていきまし
た。合同稽古は熱中症になら
ないように配慮しながら和気
藹藹の稽古になりました。
懇親会は四十名の剣友に参
加いただきアイガーデン下平
で開催。戦後本校剣道部の初
代顧問井坂弘文先生の挨拶、
県剣道連盟副会長平子允秀先
生の乾杯の発声で会は始まり
ました。戦後間もない頃の練
習場所・剣道防具のない時代
合宿所など無く教室での合宿
の思い出等、各自が高校時代
の思い出をスピーチして会は
盛り上がりしました。
時の流れは、川の流れのよ
うであってとても早いもので
す。絶え間なく未来のあなた
から自分の前にやってきて、
今、現在となり、そして過去
へと流れて消えて行きます。
私たちは流れて消え去った過
去の日々をどんなことをして
も変えることはできません。
まだ、届かぬ未来も、空想、
想像はできても、今はどうす
ることもできません。私たち
が何とか、どうにかできるの
は「今、現在」だけです。先
達が築いてくれた日本文化を
正しく伝承し、今日という一
日をしっかりと生き、充実した
日々を積み重ねることができ
るよう心掛けたいものです。

シンポジウムOB・OG会
高三十七回卒 高野 健二
毎年、新春の恒例行事とし
てOB・OG会が今年も
一月二日に開催されました。
朝からソフトテニス部のOB、
OGたちが集まり、その場で
ペアを組み、過去の華麗な身
のこなしをイメージしてプレ
ーするも、衰えた技術に落胆し
ながらソフトテニスの試合を
楽しみます。



夜には懇親会が行われます。
男子は、顧問であった小幡
(高29回)・斎藤(高30回)
両氏と現顧問の教え子で、卒
業した部員達が集います。こ
の集いも数えること、今年の
正月で記念すべき二十回目と
なりました。また、女子は坂
本・渡辺両氏に指導を仰いだ
OGたちが集まります。数年
前までは、男子と女子が分か
れて一次会を行い、二次会は
男子の会場に女子が合流する
形態でしたが、昨年度からア
イガーデン下平にて、一次会
から男女揃って新春の会を催
しています。卒業年度毎、O
B・OGが各方面で活躍して
いる近況を報告します。また
その姿を顧問の先生方は頼も
しく思い、また誇らしげな眼
差しで見
ている姿が印
象的です。
年を重ねる
毎に会は盛
況を増し、
今春は総勢
八十一名の
出席でした。
来春の会も
多くのOB・
OGが楽し
みにしてい
ます。



定子 9回 秀立
平(旧姓) 允足

母校と私の人生

竜一時代は人生の原点

竜一を卒業して、五十年余
りの歳月が流れてしまった。
実に早いものである。

今、日本は高度成長により、
生活が豊かになっている。私
が竜一高に通った昭和三十年
代前半の頃は、敗戦の色濃く、
物資も金もなく、どん底で苦
しい生活をしてきた。自動車
などは少なく、営業用では運
転席が木張りのトラックや木
炭バスが走っていた。

そして竜ヶ崎鉄道では、弁
慶号という蒸気機関車が活躍
していた。また当時、道路は
砂利道なので、トラックが通
たあとは、前が見えなくなる
ほど砂埃がひどく、現在では
考えられない道路状況だった。
家庭用品においては、バイ
ク、テレビ、洗濯機が始め
た頃であったが、それらを所
有している家庭はほとんどな
く、テレビは公園や神社の境
内に街頭テレビとして設置さ
れ、プロレスや大相撲中継等
を近所の人々みんなで観戦し
たものである。

私の竜一時代は、社会人でも
あり、高校生でもあり、生
活状況は非常に厳しい中でも
充実していた。
六十有余の石段を上がって
見ると、街並の奥に夕日に映
えた「富士山」と「筑波山」
が、実に素晴らしい見えてい
たのが今でも脳裏に焼きつい
ている。
父は、ニューギニアより戦
病者で帰還し、大徳町宮前、

代々続いた「植木屋」という屋
号で、薪炭雑貨・酒・たばこ・
塩等を販売していた。
また、運送業もして(今はト
ラック等であるが当時は牛車や
馬車であった。)いたが廃業し
た。
八人家族を母一人の働きで生
計を立てていたので、長男の私
としては、全日制に行きたいと
は言えず、夜の定時制を選んだ。
昼は、竜ヶ崎の郵便局に勤め、
日曜日は龍ヶ崎カントリークラ
ブでキャディーのアルバイト、
充実した四年間であったが、期
末テストの時期は睡魔に襲われ
大変であった。

当時の校長は飯塚宗之助先生、
定時制主事は土屋重徳先生、担
任は足立義夫先生、教科は、佐
藤正一郎先生、蓮沼節哉先生、
石神由範先生、鈴木益夫先生、
山岡克先生、野上健一先生、石
川武雄先生でした。先生方の質
実剛健の教えのおかげで今の自
分があると思っており感謝して
おります。

定時制機関誌「蛟龍」に「麦
」という題で投稿した事がありま
す。
踏まれても、踏まれても、立
ち上がり、最後には立派な実を
付けると言う意味だったと記憶
しております。当時の私は、常
に前向きで、精一杯、一生懸命
そして、不転転の気持ちで、自
分を、自分に、自分しようとい
心掛けていました。
学校行事も全日制と同時進行
でしたので、楽しい思い出が沢
山あります。運動会での仮装行
列、一月十五日成人式の日、校
内マラソン、修学旅行等々です。
生徒会役員も会計と生徒会長も
経験させていただき、現在非常
に役に立っております。
卒業式には、県定通教育振興

会長より表彰を受け、誇りに
思い今も心の奥に大事にして
あります。当時この事は、地
方新聞の一片「常陸の人々」
に掲載されました。
部活動では、剣道部に所属
し、時間の取れた時は、全日
制に稽古をお願いもしました。
稽古場は三段床の講堂で文化
部と一緒にあり、有効に使用
し効果があつたと思います。
夏合宿にも参加をし、机の
足を縛り、その上に布団を敷
き蚊帳を吊って寝たものです。
ミーティング、勉強、食事作
り等、交友を深め、有意義な
時間を過ごす事が出来ました。
当時のメンバーはインターハ
イにも出場したハイレベルで
あった。顧問は井坂弘文・齋
藤邦彦先生、OBで私の師匠
である武田治衛先生、OBの
島田栄一、岡田透、川上良雄、
金谷直次郎の各先生に指導さ
れました。今も続けられてい
るのも、先生方の基本中心に
重点を置いた指導のおかげと
思います。感謝しております。

その後、茨城県警に四年間
剣道特別訓練生選手として活
動、縁あって日立市のパン店
「キムラヤ」の一人娘と一緒に
なる。パン学校を出、現在に
至る。
竜一高との関わりは、年一
度の剣道OB会稽古会、懇親
会、部外者指導として日立一
高剣道部で十四年間勤めた中
で、母校竜一の剣道部と合同
合宿稽古、喜仙での両校での
懇親会等である。これらを実
現できた事が最大の喜びであ
る。この頃私も国体、都道府
県大会等に出場した。

また、八段に合格した際も
竜一剣道部全体でお祝いをして
頂き感謝しております。会
場はアイガーデン下平でした。
現牛久市長でOBの池辺勝幸
氏にも忙しい中、駆け付けて
頂き感動しました。
恩師蓮沼節哉先生にも祝詞、
色紙を頂き胸が熱くなりまし
た。OBの岡村忠典先輩にも
頂き身の引き締まる思いでい
っぱいです。岡村先輩は、竜一
出身では最初の八段合格者で
元高体連剣道部委員長も勤め
られ、少しでも見習い努力精
進し、後進のお役に立てるよ
う頑張りたいと思っております。

県北日立では、同窓生澤渡
淳三氏(日立市商工会議所副
会頭)茂手木甲壽夫氏(前日
立保健所長、現、地元の竜ヶ
崎保健所長)と三人で竜一の
事、育った頃の田舎の事、現
役の活躍の事、同窓生の活動
の事、酒を飲みながら年に二
回から三回、語り合っていた。
上下関係なく非常に楽しい会
であり、二次会は澤渡氏の歌
には驚かされている。正にプ
ロであり本当に素晴らしい。
この三人の繋がりは一生続け
て行きたい。
クラス会もオリンピックの
開催される年、四年毎に行い
地元の方にお骨折りを頂いて
いる。古稀を過ぎた仲間であ
るが何故か少年に戻り昔話に
花が咲いている。不思議な事
である。体調不良、他界され
た方もだんだん出て来て一抹
の淋しさも感じている。
健康に留意し微力ではある
が世の中に貢献しようとい心掛
けている。

自営の製パン業も朝四時か
ら家族、従業員に協力を得て
愛と夢を売る為に生涯現役を
目指し頑張っているところで
す。
仕事以外に、パン業会、洋
菓子協会、和菓子協会、食品
衛生協会、保護司会、神社お
寺、茨城県剣道連盟、中小企
業中央会等の役員として毎日
活動しながらお世話になった

方々に少しでも恩返しが出
来たらと考えております。
竜一時代は人生の原点で
した。
在校生の皆様の活躍と同
窓生の益々の発展を祈念
申し上げまして私の竜一時
代の思い出話を終りにしま
す。

白幡台 私の宝物
二十五回生は昭和四十五年
の入学です。女子は三十人ほ
どでした。
入学した時にはすでに長髪
は認められていましたので、
入学時の坊主頭は、すぐに髪
が伸びて、学帽もかぶらな
くなりました。友人達と集ま
っては、無茶なこともしてい
ましたが、先生方は大きな目
で見て下さっていました。一年
は大塚彰吾先生、二年は小竹
修先生、三年は松島博先生が
私の担任でした。
新校舎が建設中で、一年生
の大半の授業を受けたプレハ
ブ教室は、雨音がうるさく、
蒸し暑く、ヤブ蚊に悩まされ
たこと、夏の高校野球の応援
に熱中したこと、武道場の凍
える寒さの中、鈴木益夫先生
から柔道の授業を受けたこと、
JRCに加入し、障害者施設
でボランティアをしたことな
どをなつかしく思い出します。
白幡台の三年間、そして得た
友人は、私の大切な宝物にな
っています。

臨床医をめざし医学部に進
んだのですが、公衆衛生学を
学んでから、社会医学に興味
をもち、卒後は茨城県庁に入
庁しました。保健所や県庁に
勤務して、この四月に始めて

竜ヶ崎保健所での勤務になり
ました。管内の龍ヶ崎、取手、
牛久、守谷、稲敷、利根、河
内の五市、二町の同窓の方々
には、大変助けていただいて
感謝をしています。なお、茨
城県の知事部局と教育委員会
には、一〇〇名ほどの同窓が
勤務し、県庁白幡台(会長
菊地通雄、県南県民センター長
で定期的に懇親を深めていま
す。

龍ヶ崎で勤務するようにな
り、竜一高の生徒さんを見か
けることが多くなりました。
私達の頃と変わらない制服の
生徒さんたちが、自転車を通
学する姿や、車中で勉強をし
ているのを見ると、四十年以
上前の自分に重ね合わせて、
励ましの言葉をかけたくなり
ます。白幡台で多くの友人を
得て、実りある高校生活を過
ごされることを願っています。
ところで、二十五回生は、
来年度六十歳の節目の年を迎
えますので、発起人代表の石
引督規君を中心に、同窓会の
開催を企画しています。多く
の同級生で、大好きな母校と
応援歌を歌いたいと思います。
是非出席をお願いいたします。
最後になりますが、同窓の
皆様のご健勝、母校のさらな
る発展を心より祈ります。

後輩たちに望むこと
私は、高校の三年間を白幡
台で過ごし、高校の国語教員
になって、四年間を再び白幡
台で過ごす機会を得ました。
私たちの世代は、比較的の
んびりとした自由な雰囲気
の中で、竜一高での高校生活を

高33回 有川 保

謳歌していたと誰もが感じているのではないだろうか。私ものんびりと本を読んだり、遊んだりしていました。中でも野球応援は好きでした。卒業後いまだに球場に足を運んでいます。野球好きの卒業生は結構いて、球場に行くが大先輩から後輩まで、よく会います。これが竜一高のいいところですね。公立の進学校でありながら野球が強い。これを私は誇りに思っています。野球も勉強もしつかりやっています。

それから、たくさん本を読みました。世界の名著、詩歌等、手当たり次第に読みました。それはそれで意義深いものだと思うのですが、もっと社会に対する目を開いてくれるような本を読むべきだったと今では思っています。

というのも、教員七年目で母校に戻りましたが、後輩である生徒諸君に何を伝えるかを考える上では、日本史や世界史といった受験のメイン科目以外の倫理社会や政治経済といった科目の勉強が不可欠であることを痛感したからです。私自身、受験科目は日本史でそれを中心にして勉強をしました。大学に入ってから世界史の知識がないことを恥じ、世界史関係の本をすいぶん読みました。世界史を勉強すると地理も必要だし、社会制度を理解する上では、政治経済や倫理も必要です。こういった分野にも手を広げて読みました。でも、高校時代に読むべきでした。

思いいます。とにかく勉強してほしい、これが一番の願いです。日本は民主主義国家であり、「民」主である以上、国民が主権者として国政の方向を決める責務があるという自覚が必要です。人間ですから、どうしても私利私欲が出ますが、全体の物事を決めるときには私利私欲を抑えて考えることが必要です。公益、国益という言葉もありますが、そんなに大袈裟に考える必要はないと思います。ですが、自分が損をしても全体にとっていいことであれば、それを支持できる人間になるべきである、そうではない、自己の利益に反する判断をしない」という命題があるのです。この命題が正しいのであれば、「自己の利益」と「私利私欲」の違いが何なのかを考える必要があると思います。でも、そもそも「合理的な」という言葉自体胡散臭いんですね。すべての国民がこういった視点を持って国政の方向を決めることができる現実を考えたとき、竜一高のようにある水準以上の学力を持った生徒が集まる学校の卒業生は、社会に出てからリーダー的存在にならざるを得ないと思います。リーダーが私利私欲に突き動かされる人材であっては困るので、竜一高の卒業生には、それにふさわしい勉強が必要なのです。私利私欲を離れて物事を洞察するために、幅広い勉強が絶対に必要だと思えます。幅広い勉強をするためには、一つの考え方として、理系に進むのであれば人文・社会科学を、文系に進むのであれば自然科学を勉強してみることです。こういった目標を高校時代にきちんと持つてほしいのです。

人がいます。その人は、理系の学部に進んだので、大学時代に本を読もう、特に小説をたくさん読もうと決めたそうです。それが卒業論文に結実し、本として出版されました。今では大学の先生になっていると聞いています。

幅広い知識と私利を離れて物事を洞察する目を養うために、とにかく勉強してください。そして確固たる価値観を持つてほしい、そう思います。また、学力と人格を乖離させないでください。学力的に優れた人は人格的にも優れていてほしい。最終的に最も大事なものは人格であることを肝に銘じていただきたいですね。

私自身は、竜一高での三年間で、良き師や友に恵まれ、自分の汚い考え方やずるい発想法を嫌というほど自覚し、大きく価値観を転換させることができました。竜一高には、そういう恵まれた環境があり、自分自身が友にとつての良き友になる努力をする時間があるのです。私自身の三年間を振り返りつつ、後輩の皆さんには白幡台での三年間を大切に、特に勉強をしていただきたいと強く願っています。



高51回 村上 健志

誇り高い母校

高校時代の思い出といえば、サッカー部の引退試合で涙した事。皆に隠れて好きな人に告白した放課後の教室。といえたら良いのだが、全くとってそんな事実はない。思い出されるのは、厳しい日々の練習を耐え抜いたことに裏付けされた堂々とした顔立ちで廊下を歩く野球部員達に漠然と

嫉妬していた自分、仲間達と面白いあだ名を考え、どれだけの射たものかを真剣に競い合っていたくらいである。

そんな物語の主人公として、なんとも魅力のない僕には、やはりというか、高校時代において具体的な夢や目的などなく、高校三年生になれば、進学校の生徒らしく、周りが大学進学を目指しているからといった非常に主体性のない考えのもと、流されるように受験勉強を始めるのである。

一見、マイナスのように思われるかもしれないが、これが竜一の素晴らしいことではなからうか。「受験勉強をしないやつは、非常識だ」と強制された記憶など毛頭ない、しかし、多くの学生が受験を目標に勉強をする。勉強とは、青春時代において、若者を惹き付ける魅力は非常に低く、やらなくてはならないものと煙たがられるものであるが、大人になれば、決して学者になるわけではなく、その知識自体を仕事に生かすことがなくとも、知識は美しいと気がつくものである。そんな勉強に、きつかけは、なんとなくではあるが、これまで何かに打ち込んだ事のない自分を真剣に向き合わせてくれ、受験勉強という青春をさせてくれるようなことが当たり前の環境の竜一は、ボクにとつて誇り高い母校である。竜一が、益々発展する事を願っています。

多士 清々③
法曹界の要職を歴任した野村 佐太郎氏
連沼 節哉（旧中三十五回）



野村氏は取手市桑原（旧寺原村）出身で、私の母（すぐ上の姉）の話しによると、父（定次郎）は長男の誕生を喜び、屋号を「佐五衛門」と言っていたので「佐五衛門家を太く大きく育てる男」との期待と自分の名前の「定」と同じ発音の字を選んで命名したとのこと。長じて、常磐線の線路を挟んだ隣の集落の取手市青柳（旧井野村）出身の武藤清氏（文化勲章受章者、高層建築の先駆者）と、当時はまだ珍しかった自転車、肩を並べて龍ヶ崎中学校に通学した。その後、二人は進んだ道は異にしたが、終生の親友であった。

氏は早稲田大学法学部に通学し、研鑽を積み在学中に司法試験に合格した。卒業後は東京地検で司法官試験のスタ

であった。国会議員やその他の各方面から「自衛隊を出動させて鎮圧せよ」との進言が東京地検にも多数寄せられた。しかし、これは前例のない方法であり、警視總監などとも連絡をとり、近県から警官隊を加勢してもらい、自衛隊は出動させなかった。あの時ばかりは眠れぬ夜が続いたという秘話である。

次いで、昭和三十五年には広島高検検事長に昇進した。全国で八人しかいない検事長に私学出身者が任命されたのは珍しいと当時評判になった。昭和三十八年には名古屋高検検事長に転任し、四十一年に定年退官した。在職中は権力を振り廻す人や筋の通らない話には、敢然と立向かったのだ。一部では鬼検事とまで言われたが、反面役所内では日頃地味な仕事をしている守衛や運転手などには、やさしく接し、家族の就職などの面倒も見ただけで、転勤後も慕ってくる人が多かったそうだ。

他にも、多忙な公務の傍ら郷里の発展に尽力を惜しまず、常磐線通車連盟の会長に推され、常磐線電車の松戸から取手までの延伸を実現するため、進駐軍はじめ各方面に陳

情して、開通への扉を開けたことなど、多くの方から感謝されていた。

退官後は一転して弁護士を開業。各種事件の弁護団長を勤めた。また、請われて東京大学法学部教授となり、後輩の育成にも当たった。

昭和四十八年春には、長年にわたる功績に対し、勲一等瑞宝章受章の榮譽に浴し、夫人同伴で宮中に参内して、天皇陛下から親しく授与され、感激していた。

母校についても終生関心を持ち、私も会うたび現況を尋ねられた。同期の飯塚宗之助校長の時には、私蔵の図書の一部を図書館に寄贈したり、進駐軍下りの応接セットを校長室に贈ったりした。その後も、甥っ子が校長をしていて時に挙行した創立八拾周年記念事業に際しては、体育館の綴帳が古くなり困っていたので、寄附をお願いしたところ快諾して高島屋を通じて、現物で寄贈してくれた。創立百周年で更新するまで二十年間体育館のステージを飾っていた。

昭和五十八年七月、享年七十九歳で、父親の期待に応えた充実した人生の幕を閉じた。

訃報

菅原 進氏（高9回卒）

元硬式野球部監督の菅原進氏が平成25年10月9日に逝去されました。菅原氏は昭和39年から昭和50年まで本校の硬式野球部の監督としてご尽力されました。

昭和41年（44年ぶり）と昭和50年の夏に甲子園出場を果たしました。

本校監督として最後の年になる昭和50年の2度目の

甲子園出場の出場選手であった現監督塚原勇教諭（高28回）は、次のように述べています。

「菅原監督は、竜ヶ崎一高を監督就任わずか3年目にして甲子園に導き、東関東大会に連続して出場させるなど、短期間で関東の強豪校に育て上げた名将と言われている。当時から、とにかく厳しく、その迫力にグラウンド内は常に緊張感に包まれていた。その指導は、野球の技術だけに留まらず、学生野球

の精神を、グラウンド外での細かい生活指導でたたき込まれたことを思い出します。

今年の8月初旬、体調が悪化しているにもかかわらず、グラウンドに足を運んでくださったとき、久しぶりにアドバイスを受けることができた。そのときの、まだ衰えぬ野球の情熱に驚かされました。

今回の訃報は、竜ヶ崎一高野球部の関係者にとつて大きな悲しみですが、菅原監督の残した精神野球の伝統は、多くの教え子達によって、現在も脈々と受け継がれているのは間違いありません。」

なお、菅原氏は、昭和50年から平成12年まで土浦日大高校で野球部監督を務め、昭和61年夏には、甲子園出場を果たしました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（倉持 正男）

校歌作詞者 寺田彰司について

寺田 典夫（高5回）



はじめに

この度、現茨城県立竜ヶ崎第一高等学校教頭倉持正男先生から、校歌の作詞者寺田彰司について執筆の依頼を頂きましたが、正直なところ情報量も少なく、どこまで祖父彰司のことを執筆できるか、全く自信がなく迷いました。然し、もし、私が、執筆しなければ、校歌作詞者寺田彰司の学校愛と、若者に将来を託そうとした人間像、そして、作詞に懸けた情熱を伝えさせて頂く機会が永遠に葬り去れることを憂慮し、戸籍証明書、家に残された書類、学校関係者、兄妹、親戚からの協力を頼りに、羅針盤のない船に乗り込む気持ちで原稿執筆を承諾させて頂きました。

寺田家と寺田彰司の生い立ち

寺田彰司は、明治十六年六月二十七日青森県弘前市で父次郎、母なおとの間の七人兄妹の長男（寺田家八代目当主唯一人の男の子として誕生した。由緒書によれば、寺田家の家紋は、揚羽の蝶、奥州津軽の100石の黒印を有する士族であり、代々教育者が多く、先祖は、漢文学者として津軽家に参上し、その折、拝受した感謝状が残っている。然しながら、身分制度廃止に伴い士族の肩書も消え、政治を夢見た寺田次郎の父太次郎が選挙に手を出し、多額の借金を負うことになった結果、下級武家長屋に引越した余儀なくされた。彰司の妹のたけが、生前、債権者に引き渡された塀に囲まれた蔵のある家を見ながら、涙ながらに、政治には絶対手を出すな！と私に口癖のように言ったことを覚えている。

学校教育時代と進学

明治二十二年弘前朝陽尋常小学校入学から弘前市立高等小学校卒業までに数々の賞を受賞、明治三十四年青森第一中学校卒業と同時に代用教員に採用。それを機に修身・国語・漢文・歴史・地理・数学・物理・習字・体操等の検定試験に合格し、正教諭の免許を取得した。然しながら、彰司の目標は、小学校の教諭で満足する事ではなく、常に高等教育に目標を置き、日本の将来を担う若者に教育を通じて健全な精神の下での健康と、尊敬される人格者の育成に努めたといえていた。文部省発表の臨時教員養成所規定（明治三十五年三月）の情報をいち早く入手し、国語漢文学専攻にあつては、「国語漢文科ノ学科目ハ倫理、教育、国語、漢文、英語、歴史トス」の科目の一つである英語の勉強のため

養成所卒業後の職歴と結婚

明治三十九年三月東京帝国大学第一臨時教員養成所卒業すると、翌四月辞令により広島県立三次中学校教諭となり、明治四十一年五月岩手県立遠野中学校教諭を経て、明治四十二年一月茨城県立龍ヶ崎中学校教諭として赴任した。その間にあつて、彰司は、二十

龍中赴任から校歌誕生まで

五歳の時、岩手県で弘前出身の成田りつ三十三歳と見合い結婚し、龍ヶ崎の地で一女（はつえ）を授かった。妻りつは、見識も広く、読書欲が旺盛であり、琴やオルガンなどの楽器も嗜む気丈な女性であつた。

病魔との闘い

彰司の教育に賭けた情熱も、非情なるかな、三十歳の若さで肺病（肺結核）に冒されたがらも、内心、体力の限界を感じつつ、無理を承知で教壇に立った。そう言った責任感とは裏腹に彰司は、志なれば市・誓願寺で執り行われた。

秋の叙勲・褒章

浅野 敬繁さん（高14回）
元公立養護学校校長
●藍綬褒章
平川 和文さん（高23回）
河内町消防団長

め正則国民英学舎に入学するなど、迅速な対応をしている。臨時教員養成所入所にあつては、「規定試験ハ中学校及師範学校ノ卒業者ニ限り時宜ニ因リ試験ヲ行ハサルコトヲ得」および「養成所ニ於テハ授業料ヲ徴収セス」の二箇条は、彰司にとって、勉学へのモチベーションを大いに高めたことであらう。晴れて、明治三十七年四月東京帝国大学第一臨時教員養成所に入所、国語漢文学専攻科目を選択することとなった。そして、明治三十九年三月同養成所を卒業した。

龍中赴任から校歌誕生まで

彰司が龍ヶ崎中学校に赴任したのは、開校九年目の冬季学期の始まりであつた。若者に対する教育への情熱を持つ龍ヶ崎中学校に赴任した時、眼に映った小高い丘、緑の木々に囲まれた校舎、そして、広い敷地など、素晴らしい環境をこよなく愛した。そして、自らは、兵役体格検査が乙種であることから、国家に対する「忠」を果たせない自責の念もあり、将来、日本を担う若者に対し教育を通じて国家への責任を果たしたいと言いう信念を心に焼き付け、情熱をこめ、献身的に教鞭をとった。当時の生徒は、交通手段もなく、毎日片道二里・三里の道のりを三・四時間かけて徒歩で通学するのが普通のことであり、時間を無駄にせず、本を読みながら通ったと言いつた。龍ヶ崎は、田んぼに囲まれた農村地帯であり、農繁期には、家族単位で農作業をするため、強制的に学校を休まされるなど、農作業を手伝うのが当たり前の日常生活であつた。このような、恵まれたとは言えない生活環境の中であつて、勉学の機会を得た若者は、艱難辛苦、向学心に燃え、将来の夢へのチャレンジ精神を貫徹し、中には後年、日本の経済界をリードする偉大な財界人、地域社会のリーダーとなつた人もいた。

白幡臺の雪月花
四季のりをり常總の
平野にしろくかやくは
高潔無垢の別天地

龍ヶ崎中学校においては、明治三十八年、校訓は既に制定されていたが、彰司の赴任当時には校歌がなく、国への忠誠心の育成には、勉学のため生徒の心を一つにする必要があると考え、当時の若者がみなぎる血潮で、好んで寮歌を歌っていたように、希望に満ちた将来の夢に通じる校歌が必要である事を痛感し、生徒たちが自己啓発し、伝統を学校に残すよう指導するのが漢文担当の自分に課せられた使命と肝に銘じて執筆に取り組んだ。そして、念願の歌詞は、国文学者芳賀矢一の校閲を受けて、明治四十五年制定された。この歌詞に込められた思いは、他校の校歌の歌詞と比較する時、その違いが歴然としている。五番の「石段登る六十餘 一足ごとに踏み固め、心を鍛え身を練りて忠良有為の基たてん」と結んでいるが、この歌詞全体が学生に対する強いメッセージであり、建国の武士道精神が盛り込まれている。「千秋の雪積もりたる」から始まる歌詞は、湧き出るエネルギーを伴った曲に乗せられ、力強く、心の奥深く、遙か遠くまで響き渡る伝統の校歌となつた。

石段のはる六十餘
一歩毎に踏みかため
心を鍛へ身を練りて
忠良有為の本たてん

※挿入の校歌は大正元年11月25日発行の「校友會雜誌第拾参號」から転載。
現在の校歌は若干修正が加えられている。

受章おめでとう
ございます。

春の叙勲・褒章

●旭日双光章
櫻井 凱夫さん（高8回）
元県屋外広告美術協同組合 理事長

●瑞宝双光章
山崎 恭弘さん（高12回）
元日本郵政公社職員

秋の叙勲・褒章

●瑞宝小授章
浅野 敬繁さん（高14回）
元公立養護学校校長

●藍綬褒章
平川 和文さん（高23回）
河内町消防団長

母校の思い出



高32回
栗山 松雄

甲子園への切符

卒業して既に三十四年。そんな私も今では二児の父です。長男は、この夏まで高校球児でした。そして、最後の最後に甲子園への切符を手に入れることが出来ませんでした。その時ふと、高校時代を鮮明に思い出しました。

地元ということもあり、祖父の代から通った竜ヶ崎一高。幼いころから、夏になると良く父と一緒にラジオで聞いていた高校野球。おぼろげに覚えているのは、県大会で上位に入っても千葉県との代表決定戦、かなりの確率で、千葉県の高校に敗れて、なかなか手に入らなかった甲子園への切符でした。そんな時、私が中学校二年生の時でした。

54インング無失点という、大記録を打ち立て見事に、甲子園への切符を手に入れた先輩方、テレビで目にした甲子園は、私の憧れの場所となりました。

私自身は、野球への道には進んでおりませんでした。が、高校三年生の時に、ついにその切符を手に入れた？と思えました。

一回戦対大宮高戦8-0、二回戦対太田一高戦2-0、三回戦対麻生高戦19-0、四回戦対佐竹高戦3-0、そして準決勝対鉾田一高戦6-0。その当時の強豪校を次々と打ち破り、もう少して甲子園への切符が手に入るところでした。この原稿を書くに当たり改めて、その当時の戦績を見ましたが、ここまで無失

点に抑えるとは、関口投手を擁して甲子園へ出場した昭和五十年を思い出します。その時、迎えた準決勝対土浦日大戦、事実上の決勝戦は、6-2と甲子園への切符はすでに手に入れたものかと思ひ込んでいました。ところが、創部三年目となる無名の明野高校との決勝戦。当日、浮かれ気分です。援団のバスに同乗させてもらいました。しかしながら、スコアボードには2-3の数字が。無念にも夢はかないませんでした。在学中は、ただの憧れの場所であってしましました。

中の蛙」という言葉を、はじめに思い出します。先生が私たち学生に

「おめらは井の中の蛙なんだから」とおっしゃってました。その時はどうしてそんなことを言われたのか意味が分からなかったのですが、要するに『厳しい現実を知らない世間知らず』ということだったのです。

後で考えると、確かに竜一の生徒は、常にのんびりしていて、今を楽しんで過ごせることに幸せを感じていた気がします。たとえ受験シーズンに突入しても、その気質は変わらなかったと思います。

そのせいか、一浪するとか、いろいろな大学に合格する生徒が多かったのです。だったら初めから頑張ればいいのに！と思いますよ。今の竜一は、どうでしょうか。そうでもないことを願います。

私にはもう一つ強烈な思い出があります。竜一始まって以来の、女子応援団員になったことです。友達と二人で野球の応援団になると決め、今までの歴史を変えました。その年は先生も一人加わり、異色の応援団結成となったのです。応援団の練習はなかなか過酷でした。四股を踏む姿勢で大声を張り上げ、グラウンドの向こう側にいる先輩に、その声が届かなければならないのです。それができて初めて校歌・剛健・コンバットマーチ等の振りとう掛け声を練習するのです。髪をスポーツ刈りのように短くし、『R』の長袖Tシャツを着てスタンドに立った時は、かなり恥ずかしかったです。それでも野球の試合が始まれば、あとは夢中で応援するのみ。頭からバケツの水を浴び、勝てば歓喜、敗れば涙の熱



高32回
杉本 由美子
(旧姓：山田)

蛙と応援団

早いもので、高校を卒業して三十三年がたつてしまふと思うと、自分が歳をとったことを思い知られます。いつも前だけを見つめて今まで生きてきたので、たまにはまだ青かった青春時代を振り返るのもいいですね。高校時代を考えると『井の

い熱い日々でした。体操部員としての活動をそっちのけで夢中になった高二の夏でした。

今回の原稿を書かせていただいたことをきっかけに、改めて母校に愛情を託し、竜一の卒業ということに誇りをもって、これからの自分の人生も、さらに充実したものになるよう、努めていきたいと思いました。

最後に、お世話になった先生方、教員たちにはみんな先生方にお会いしたいと願っています。同窓会等の機会がありましたら、可能な限り足を運びください。お待ち申し上げます。



高47回
飯塚 敬史

六年分の感謝

私が入学したのは平成四年。前年まで、二年連続で野球部が甲子園出場を果たしていた時代で、文武両道を掲げる伝統校に合格できたことを両親と喜んだことを覚えております。また、入学当初、白幡台へ上がるあの長い坂道に苦労し、見事に咲いていた桜どころではなかったことも覚えております。あの坂道には本当に鍛えられましたよ。

高校時代を振り返ると、自分の人生を大きく変える刺激的で衝撃的な方々に出会ったことが私の思い出となっております。甲子園を目指していた方々、全国大会や関東大会に出場された方々、国体の候補選手となったサッカー部のチームメイト、部活動に励みながらも学業でも優秀な成績を修めていた同級生、集会で歌う生徒会長、白龍祭を改革

しようと集まった仲間、作曲を行ない音楽活動をしていった友人、打ち上げの設定に長けた友人と、個性溢れる有能な方々から刺激を受け、自分探しをしていました。将来は体育教師になりたいとうっすら考えていた高校時代の私は、野球部に負けるのを合言葉にサッカー部の活動に仲間と励み、二年生から始めた生徒会活動にも熱を上げ、友人との青春にばかり時間を割き、学業を疎かにしてしまいました。しかし、このように活動させていたことが、卒業してよくよく皆が口にして言うことが救いである。白龍祭の実行委員として勝手なことばかり考え、先生方にはご迷惑もおかけしました。その都度、指導していただき、見守って下さっていることを感じ、反省しました。今は、熱心な先生方の授業を無駄にしたことを後悔しております。

しようと思集まった仲間、作曲を行ない音楽活動をしていった友人、打ち上げの設定に長けた友人と、個性溢れる有能な方々から刺激を受け、自分探しをしていました。将来は体育教師になりたいとうっすら考えていた高校時代の私は、野球部に負けるのを合言葉にサッカー部の活動に仲間と励み、二年生から始めた生徒会活動にも熱を上げ、友人との青春にばかり時間を割き、学業を疎かにしてしまいました。しかし、このように活動させていたことが、卒業してよくよく皆が口にして言うことが救いである。白龍祭の実行委員として勝手なことばかり考え、先生方にはご迷惑もおかけしました。その都度、指導していただき、見守って下さっていることを感じ、反省しました。今は、熱心な先生方の授業を無駄にしたことを後悔しております。

四十近くになった現在、私はなんとか夢叶い、高校の体育教師をしておりますが、幸せにも、教師の最初の三年間を母校で過ごさせていだきました。大学卒業後、当時の学校長をされていた横須賀英明先生（高十回卒）のご尽力で、母校の教壇に立たせていただきました。教師としてのあり方、指導法、お酒の飲み方など、基本的なこと全てを母校で教えていただきました。高校の三年間だけでなく、社会人の最初の三年という、人として重要な時期を竜ヶ崎一高で過ごさせていだき、育てていただいたことに、この場をお借りして御礼申し上げます。温かくご指導を頂き、本当にありがとうございます。最後にありますが、母校の

益々のご発展を心より祈念いたしております。



高47回
中村 久美

全力疾走の三年間

竜ヶ崎一高での三年間は、勉強や部活動に全力で取り組んだ毎日でした。個人的な先生方による密度の濃い授業に加え、朝夕の課外授業や筑波山での学習会など、学びの場は無制限でした。恵まれた学習環境の中で、将来の目標に向かって努力する友人たちの刺激を受け、大好きな英語を必死に勉強したことを思い出します。

担任の先生には、努力を怠けたり、弱音を吐いたりして叱られたこともありましたが、一方で努力した成果を認めていただいた時には、大きな自信となりました。一人ひとりの個性を大切に、時には厳しく、常に温かい心で、卒業まで熱心に御指導くださったことに、心から感謝しています。

白龍祭、球技大会や野球応援など、記憶に残る行事は多数ありますが、剣道部に所属した私には、武道場で仲間と過ごしたことも大切な思い出です。どんなに厳しく辛い稽古も、仲間と励まし合うことで乗り越えることができました。試合の勝敗よりも、仲間と目標を共有して切磋琢磨した日々の稽古の方が大切な経験であり、心の支えとなっています。基本に忠実な剣道を教えてくださった顧問の先生にも感謝しています。

また、夏合宿やOB会において、多くの先生、先輩方と世代を超えて剣を交え、技だけではない様々な教えを受け

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

お互いに刺激し合える友人や尊敬できる先生に囲まれ、色々なことを学び、充実した時間を過ごした三年間は、かけがえのない財産となりました。何事にも挑戦して精一杯取り組むことの素晴らしさを教えてくれた母校に感謝しています。

現在、私は行政サービスの担い手として、多くの人とかわる仕事をしていきます。今後も、母校で培った精神を忘れることなく、石段を一足ごとに踏みかため登るように、一日一日を大切に積み重ねていきたいと思ひます。

今日も、白幡台では数々の物語が生まれていることでしょう。母校の益々の発展を心からお祈り申し上げます。



高57回
黒川 瞳

素敵な青春の思い出

竜一との出会いは中学校の柔道部。合同練習がきっかけで毎日、愛宕中での練習後に自転車走らせ竜一に出稽古するようにになりました。練習はキツく先輩方もよく愚痴をこぼしていましたが、アットホームな雰囲気が好きで次第に竜一に入りたと思うようになりました。こんな志望動機でしたから、入試の面接では「部活以外に頑張りたいことは？」と聞かれ言葉に詰まっ

てしまいました。入学（入部？）したい気持ちを感じていて、多くのか、平成十四年の春、無事竜一の仲間入りを果たしました。

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

再建中であり、警察署の道場やたつのこアリーナ、他校など色々な所に出かけねばならず苦しかった記憶があります。新道場が完成した時には、やっと自分たちの本拠地ができたと思ひました。練習は土日も含めて毎日あり、加えて冬場は朝練に昼練もありました。昼練をするとき、休み時間に時間がなかったため私は女子なのにも関わらず、よく友人にからかわれていました。このように柔道部では厳しい練習に耐えながら長く濃い時間を過ごし、当時の仲間は自分にとって戦友のような存在、また厳しく指導してくださった羽成先生は就職や結婚のことも相談する人生の師です。

高三の夏に引退すると生活は受験に向けて一変。放課後はいつも教室で同級生たちと過去問を解く毎日でした。疲れると皆で担任の谷畑先生を訪ねて理科教室にお邪魔し、おしゃべりをしていました。色々なプレッシャーがある中でこの時間は最高の息抜きでした。また、受験勉強では数々の横倉先生をはじめ、各教科の先生方が専用に対策して下さり、一昔前に流行った漫画「ドラゴン桜」のようなサポートをしていただきました。無事に東大に合格できたのは、先生方のおかげです。

竜一での三年間、振り返れば前半は体、後半は頭を酷使してよくあんなに頑張れたなという感があります。慌ただしくがむしゃらな毎日でしたが、だからこそ今の私の糧となっている、素敵な青春の思い出です。

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

たことも貴重な経験です。今後も、剣道を通じた出会いを大切に、稽古を続けていこうと思ひます。

部室までダッシュ

高57回 直井 昌之

大学進学と同時に茨城を離れ九年、実家に帰ることになった。卒業アルバムを見返したり、当時の友人と連絡を取ると思い出がよみがえってくる。

高校の思い出といえば、やはり硬式野球部に所属したことだ。

私は小学二年から野球を始め、高校入学に際して文武両道を実践できる竜ヶ崎一へ入学した。毎日練習に明け暮れた。

授業が終わると部室までダッシュし、先輩よりも早くグラウンドに入り準備をした。一年生でベンチ入りさせてもらい、夏の大会では四回戦の土浦三高戦での最終回二者連続ホームランによる逆転サヨナラ勝ちという劇的な試合をベンチから経験させてもらった。その後、実力不足でレギュラーになれず、甲子園出場という夢は叶わなかったが、二年半の部活動でとてもいい経験をした。当時はもう野球をしたくないと思う事もあったが、大学進学後も硬式ではあるが野球部に入

った。その後、数年間野球とは離れたものの、今でも月に数回、近くの軟式野球チームに入りプレーを楽しんでいる。やはり好きなものは好きなのだろう。

授業中は先生に迷惑をかけてばかりであったが、それでも厳しく指導してくれる先生がいた。その先生は今でも本当に感謝している。高校時代、部活さえ頑張っていればいいと考えていた節もあり、文武両道を目指していたにもかかわらず、勉強が疎かにな

なっていた。今回の話を聞いたのもその先生なのだが、部活がどうか関係なくやることはやれ、おまえは出来るんだから。決してやさしいとは言えない口調だが、その意味は、その頃の自分に、伝わっていた。お陰で、受験では数学という得意科目が一つ出来た。志望大学には合格できた。

今は神奈川県で鍼灸師として働いている。日々の患者さんとの会話の中で学生時代の思い出について聞かれることがある。茨城出身の方は竜一の名前を出すと驚き、約百四十km離れた場所での伝統を思い起こすこともある。

日々忙しいと本当は当たり前ではないことが当たり前になっている。

部活一色であったが、周りの人に恵まれ支えられていた高校生活だったとつくづく思う。

振り返り考える機会を与えてくれたことに感謝したい。



高57回 高梨 美里

毎日走り込んだ

陸上トラックと通学路

私の高校時代は部活動なくして語れない。陸上競技の100m・200mを専門とし、県大会で二年連続二冠を取り、二年次には目標だったインターハイにも出場した。校舎と野球グラウンドの間にある一周200mの小さなトラックを毎日走り込んだ。急カーブを全速力で曲がるたびに、野球部の広いグラウンドを少しだけでも貸してもらえないかと思ったものだ。

部活動で活躍することがで

きた半面、高校生活の目玉となる学校行事は、大会と重なることが多く、参加できないことがほとんどであった。結局「白龍祭」には三年間参加することが叶わなかった。それでも高校時代がとても楽しかったと思えるのは、休み時間の他愛もないおしゃべりで盛り上がる友人たちがいたからである。

学校まで片道8キロの道のりを自転車通勤したのも思い出の一つだ。牛久の自宅から南下する県道48号線の直線では、なぜか向かい風の日の多かった。対向から自転車を漕いでくる他校の生徒が、追い風に押されてさっそうとすれ違っていくのがうらめしかった。長い道のり、ただ自転車を漕ぐだけではつまらない。陸上だけにとどまらない「競走心」がうずき、前を走る自転車をサッと追い越すことで、ひそかに達成感を味わうという一人レースをやることもあった。

しかし、そんな私でも雨の道のはずいぶん。雨が降っていても、今にも降りそうな空模様だと、親に頼んで車に自転車を乗せ、学校まで送ってもらったものだ。

今でも「私は往復16キロの道を毎日通った!」と胸を張りたいが、親が黙って車を出してくれたからこそ過ごせた高校三年間だったとつくづく思う。



白幡台の樹木

木野内 昭治(高十三回)

本校創立以来百年余の歳月をかけて三四十mに成長したクスノキの巨木やイチヨウ、ヒノキなどの高木の森は、この十数年整備と手入れを進めて来たので、社寺の杜の景観に似ている。生徒の学習施設に飛龍館は創立百周年の二年前に建設されたが、その杜のクスノキ、イチヨウなど樹木の景観を取り込んで建てられた。中央ロタリーのユリノキの高木は周囲を狭められたので、梢が枯れて、枝を切られたが、今は新枝葉が伸び回復している。傍のモミジバフウ二本が高木になり、枝葉の量はより多くなっている。低木のカラタネオガタマは花の芳香が六月頃の下校時に漂う。白い花の咲くヤマボウシは生物部OB会が百周年記念に植樹した。幹が赤銅色のタギョウウシヨウは一本だけに減ってしまった。リョウウブは一九七四年、前庭が整備された際、植栽されたものであるが、今は飛龍館の元に数本移植されている。

百周年記念の前年、今の本館が新築され、合わせて前庭が完成した。記念樹は、クスノキとシダレザクラ二本である。それより奥は新校舎まで、ブロック舗装の中庭になっている。

クスノキは①葉色が明るい②樹皮が明るい褐色③モコモコした横広の樹形が特徴であり、記念樹としてふさわしい。

さまざまなこと思い出す桜かな

芭蕉

サクラは日本人の心のシンボルである。シダレザクラは枝が垂れ下がり、花は淡紅色で美しい。単に花といえばサ

クラを指している。

昇降口や生徒ホールは現代的な中庭に面していて、カツラの植込が二本ある。七十周年記念の当時永久校舎と言われた新校舎が完成した時はその北側に植えられていたカツラが、ここに移植されている。

アメリカキササゲは本館の北側に植栽されている。飛龍館の建設の際、日本海(池)の上に傾いて伸びていた木が伐採されてしまったが、その種子から育てた子供の木である。

校訓碑のある植込は創立当時の二階建木造校舎前庭の様子を今に伝えている。三本のヒノキが枝葉を円錐形に伸ばし、趣がある。低木のサカキは梅雨時に白い花を密に付ける。

本校には今回の調査で、幹周り三メートル以上の巨木が四種八本あることを確認した。これは驚くべき数である。

ケヤキは巨木三本である。ケヤキの名は際立つという意味で「けやき」からきている。尊い、優秀とも言われる。本校にふさわしい木である。

クスノキは巨木三本である。クスノキは木全体に香りがよく虫除けとなるため、幹、根、葉から天然の樟脳を採る。

スタジイは巨木一本である。照葉樹林の代表で、葉はツバキの葉と同じように光沢がある。遠方から見るとブロッコリーのようなこんもりとした形である。ヒマラヤスギは巨木一本である。ヒマラヤスギはヒマラヤ産のスギの意味で、葉の形がスギに似ている。世界三大美樹(三大公園樹木)の一つ。

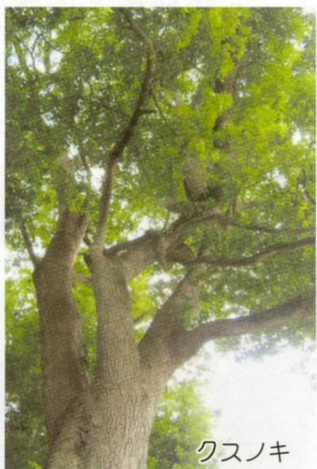
白幡台はその縁と斜面を鬱蒼とした高木が覆っている。現在最も樹高が高いと思われる木はメタセコイアであろう。体育館西方の縁にあるものは一九五八年三月、海老原龍夫氏(高10回)が割箸大の苗木を郵便小包で取り寄せ、卒業記念に木造校舎の中庭に植えた苗の一つと聞く。約三年後に現在地に移植された。秋には多数の雄花の穂が糸状に下がり、雌花の青い球果もある。もう一本南側の縁にあるメタセコイアは一九六九年木造校舎(第四館)解体を前に、切られるのを避けて、澤昌先生と生物部員達で移植したとのことである。この種は「生き化石」として発見された落葉樹であるが、今では日本各地に急速に広まっている。南縁をやや下がった急斜面に根曲がりのヒノキがある。一九七六年全国植樹祭に参加した記念に配られた苗木を生物部員や呼びかけに応じた一年生と植樹したものである。そこは腰ほどのササが生い茂った場所、その後の手入れもされなかったで、初期成長が遅れたが、十数年後に一面のササを除去すると成長を速めて、今は高木林の一部になっている。

石段の東の緩やかな斜面にはモミジ類やツツジ類、イヌツゲ、サルスベリ等が生育し、また、西側はゆるい坂に沿って、ソメイヨシノの並木がある。斜面はツツジ類の大株が埋もれていて、創立以来、長年名木を植えて来た歴史を感じさせる。

その他に白幡台を取巻く縁と斜面は西、北、北東を占めるが、アカガシやシラカシ、コナラ、ヒノキ、タブノキ、スタジイ、シロダモ、ケヤキ等の高木が、校庭と運動場を

取り囲んでいる。

最後にこの記事を書くにあたり、渡邊剛男先生のアドバイスを頂き、その上百年記念樹と巨木については、種別にその特徴などを書いた先生の文章を挿入させて頂いたことを記して感謝とします。



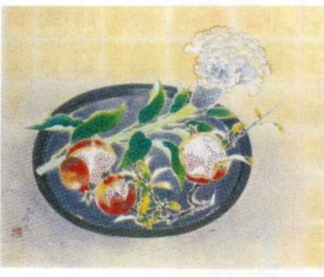
クヌギ

クヌギ

竜一所蔵美術品の紹介

白幡24号で本校所蔵美術品展「竜一コレクション」の報告がありました。この美術展を機会に、本校での展示スタイルも変えました。現在、本館一階廊下をギャラリーにして作家略歴を添えて美術品を展示しています。今号から所蔵する美術品を順次紹介していきます。

永田 春水(旧中3回)



ザクロと花(日本画 63×75)



雪笹とヒヨドリ(日本画 38×45)



庭前風景(油彩 F50)

山崎 茂一郎(旧中9回)

総会記念品の紹介

同窓会総会に出席された招待学年の卒業生全員に記念品「校章入りの湯呑」を贈呈しています。



制作者は日本工芸会正会員の植竹敏氏（高27回）で、本校の創立百周年の時には、生徒がいます。

職員室だより

英語科 寺田 義弘
今年度一学年には、常に全体に気を配りながら、生徒の英語力の向上を考えている門井美奈子先生、授業中常に笑い声が聞こえてくる坂本秀樹先生（高31回）、そんな2人の足を引っ張らないように日々精進に努めているつもりです。

寺田義弘（高40回）がいます。二学年には県の指導法研究委員会の委員長でもある木内真理子先生、早朝リーディング・ラリーも主催している若手熱血教師の小野瀬勇一先生、豊富な経験と知識量、そして素晴らしい発音で生徒のみならず我々をも魅了している飯田栄先生（高17回）がいます。三学年にはネイティブとも対等に渡り合える英語力の磯彰子先生、機械に強くICTを駆使した授業展開が持ち味の山口信之先生、保健厚生部長として多忙な中、毎回英文の個別添削を実施してくれている秋山栄子先生（高29回）、進路副部長としても激務の中、毎日昼休みも生徒の英語の指導に当たっている中井川悦子



進路だより

東京大学 1名

東北大学（現役4名）5名

筑波大学（現役22名）23名

国公立大（現役124名）144名

本校では、三年間を見通した生活・学習指導計画である「Rプログラム」（六年目）、筑波大学合格を目指す「筑波大研究委員会」（五年目）、医学部・難関理工系大学合格を目指す「RMAST委員会」（四年目）の各種事業を柱とする進路指導プロジェクトが展開されています。その成果は年々確実に現れてきており、国公立大学現役合格100名以上と筑波大学現役合格20名以上という学校目標を、三年連続で達成しました。これは、学年の枠を超えた学校全体での進路指導の形態が本校内で

定着し、〃学校の力〃が確かなものとなってきていることを意味していると思います。ただ、今年度の大学入試を振り返ってみると、必ずしも順調に事が進んだわけではありませんでした。まず、大学入試センター試験（275名受験）は、数学ⅠAと国語が大幅に難化した影響で、文系（900点満点）の全国平均が前年比40点減、理系（900点満点）が34点減と大荒れとなりました。そうしたなか、本校の文系の平均点は前年比17点減にとどまる健闘を見せましたが、理系は前年比47点減となりました。今年度は本校で初めて理系四クラス（文系三クラス）となった学年でしたが、センター試験で苦戦する理系生徒が多く出てしまいました。

では、センター試験の平均点大幅ダウンの影響で、多くの者が悩みに悩みました。特に後期試験は廃止・縮小の大学が相次いだため受験したい大学が見つからず、また低い得点率のため出願を断念せざるを得ない者もいて、前期一本勝負となった者もいました。そのような厳しい状況ではありましたが、強い気持ちをもって諦めずに努力を続けた生徒たちの「チームとしての一体感」が最後には多数の合格につながりました。

現役生は、国公立大学の前期試験に181名が挑み、100名が合格しました。前期だけで100名の合格者が出たことは神がかり的ですが、これは、中期・後期試験は38名が受験し、14名が合格しました。この結果、推薦入試の10名と合わせて国公立大学には124名が現役合格を果した、過年度卒の20名を加え、合計で144名の国公立大学

合格者数を記録しました。国公立大学の現役合格者数・過年度卒合格者数・現役と過年度卒の合計合格者数のいずれも、本校史上最多記録となりました。また、センター試験の平均点ダウンの影響は私立大学入試にも及び、全国的に国公立大学を諦め私立大学に流れたり、センター試験後に慌てて私立の併願校を増やしたりする受験生が多く、思わぬ高倍率から予想外の苦戦を強いられた場合がありました。そのような状況でも著名私立に堅調に合格者を出すことができました。

このように、センター試験の難化で波乱の幕開けとなった今年度の大学入試戦線でしたが、本校では、一定の成果を上げることができたように思います。本校は、ここ数年、国公立大学合格者数を増やし続け、安定的に筑波大学の合格者数

平成25年 3月進路状況一覧

《国公立大学》

大学名	現役	過年度	合計	大学名	現役	過年度	合計
弘前大	1	1	2	奈良教育大	1	1	2
岩手大	1	1	2	鳥取大	1	1	2
山形大	1	1	2	大分大	1	1	2
東北大	4	1	5	鹿児島大	1	1	2
福島大	3	1	4	琉球大	2	1	3
茨城大	33	5	38	釧路公立大	2	1	3
筑波大	22	1	23	青森公立大	1	1	2
宇都宮大	3	1	4	秋田県立大	1	1	2
埼玉大	4	1	5	国際教養大	1	1	2
千葉大	12	1	13	茨城県立医療大	6	1	7
東京大	1	1	2	高崎経済大	2	1	3
東京海洋大	2	1	3	埼玉県立大	1	1	2
東京学芸大	2	1	3	首都大学東京	4	1	5
お茶の水女子大	1	1	2	横浜国立大	5	1	6
電気通信大	4	1	5	都留文科大学	2	1	3
新潟大	1	1	2	静岡文化芸術大	1	1	2
山梨大	2	1	3	高知工科大	1	1	2
名古屋大	1	1	2	熊本県立大	1	1	2
神戸大	1	1	2	国公立大学合計	124	20	144

《私立大学》

大学名	現役	過年度	合計	大学名	現役	過年度	合計
早稲田大	9	3	12	明治学院大	7	1	8
慶應義塾大	3	2	5	日本女子大	6	1	7
上智大	1	1	2	東京農業大	8	5	13
東京理科大	25	7	32	東京電機大	19	5	24
国際基督教大	3	1	4	東京邦大	6	1	7
学習院大	10	1	11	國學院大	8	3	11
明治大	27	3	30	日本大	51	5	56
青山学院大	8	1	9	東洋大	29	4	33
立教大	17	7	24	専修大	14	1	15
中央大	14	5	19	駒澤大	13	2	15
法政大	38	9	47	玉川大	1	1	2
東京女子大	9	1	10	獨協大	21	6	27
芝浦工業大	10	6	16	文教大	18	2	20
津田塾大	1	1	2	千葉工業大	17	7	24
成城大	9	1	10	その他	183	9	192
成蹊大	4	1	5	私立大学合計	589	97	686

も伸びてきています。今後は、旧帝大をはじめとする難関国立大学や医学部医学科の合格者増を目標に進路指導に取り組み、さらに一段高いステップへと進んでいくことを目指していきます。そして、生徒たちには、大学受験を通して、困難に立ち向かい、それを乗り越えていく逞しさを身に付け、人間的に成長していつてもいいことを目指していきます。（小澤 茂幸）

第33回全国高等学校クイズ選手権大会全国大会出場

八月に開催された全国高等学校クイズ選手権大会の茨城県代表として室永遼太郎（3E）・川嶋星也（3G）・渡辺優雅（3G）の三名が出場しました。茨城県代表として本校が頂点に立ったのは初の快挙です。

関東大会予選会では予選ラウンドを無事通過し、決勝ラウンドではクイズ部門・アトラクション部門ともにこの大会の常連校でありクイズ研究会に所属し日々活動に勤しんでいる水戸一高や竹園高校の精鋭チームを寄せつけず、圧倒的な強さで勝ち進みました。三人はサッカー部に所属しており、県大会連続出場の実績があります。一・二年のときは部活動優先のためクイズ選手権には参加できませんでしたが、今大会にかける思いと部活動を通して培われたチームワークと積極性、冷静な判断力がクイズの場面でも遺憾なく発揮された結果、優秀な成績を修めることができたと思います。



（鈴木 恒一）

振り込め詐欺等に注意

卒業アルバムや同窓会名簿を悪用した詐欺事件が多発しています。くれぐれもご注意ください。

キズナ強化プロジェクトに参加して

本校から一年生12名、二年生12名が、二〇一三年三月十五日から二十七日まで、アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流青少年短期派遣事業(キズナ強化プロジェクト)に参加し、カナダの西海岸にあるバンクーバーとビクトリアを訪れた。

このプロジェクトの趣旨は、被災や復興の現状を被災地の高校生が海外の高校生に伝えることにあり、参加者24名は白幡同窓会から援助を受け、十二月に被災地陸前高田市を訪れた。事前に校内で募金活動を行い、灯油14缶と桜の苗木10本を被災地に届けた。この被災地訪問から各自が感じた思いを伝えるために、カナダでの発表の準備は出発まで続いた。

出発の日には、たくさんの保護者・先生方に見送られ意

気揚々と龍ヶ崎をあとにした。初日の十五日は東京のカナダ大使館でオリエンテーションが行われ、カナダに派遣される県内二校県外一校の発表を見て、生徒たちの気持ちはさらに高まっていった。

三月十六日カナダ到着。バンクーバーの天気は心配だったが、滞在中、雨なし雪だったのは二日だけだった。カナダが歓迎してくれている、みんなそんな気持ちになった。日系カナダ人の歴史を学び、戦時をカナダで過ごした二世の女性から話を聞く機会を得た。日本では知る機会が少ないカナダ移民の過酷な体験を真剣な表情で聞いていた。生徒にとっては一番思いに残っているのはウェストバンクーバー高校の生徒との交流とホームステイだろう。大雪のウィスラー山で、雪合戦をしたり、

目指し、準備に励んだ。大きな成長を感じられる立派な発表だったと多くの方からお褒めの言葉をいただいた。このプロジェクトに参加した生徒の全員がカナダで貴重な刺激を受け、自分の将来について前向きに取り組むようになったと感じている。

(英語科 木内真理子)



SPP 研究報告

筑波大学高大連携プロジェクト実施報告

本校では毎年、二年生の生徒十名程度で科学技術振興機構(JST)が主催するサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)に参加しています。筑波大学との連携により、高校生でありながら大学のハイレベルな研究に触れることができ、年間を通じて指導頂いた作品を最終的には筑波大学紫峰祭において、大観衆を前に発表するという大変貴重な経験ができるものです。今年度も学年一致の意向として参加の意思を伝えるべく、三月にJSTへ申請を提出しました。しかし、結果は残念ながら不採用となりました。

それでも筑波大学からは、「SPPとは関係なく、例年通りの企画を実施していきましょう。」という大変ありがたい言葉を頂いていたのですが、JST

に属していない以上、特に予算面において苦慮していません。そんな折、本校同窓会で運営費を負担してくださるというお話を受けた。同窓会の多大なるご支援の元、今年度も貴重な経験を生徒へ提供できることとなりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、今年度も例年通り、第二学年から選抜された十名の生徒(岡野光希、齋藤将大、鹿田陽斗、長竹翔吾、中村陸生、荻原恵、奥田柚香、高瀬千尋、鶴岡菜帆、鳥羽美咲)が参加しています。六月十八日に筑波大学紫野准教授をお招きし、本プロジェクトにおける最適化モデルについて講義を頂きスタートとなりました。その後二班に分かれ、最適化モデルである「〇〇をうまく決めて〇〇を最大(最小

習できたことはもちろん、プレゼンテーション技術、そして筑波大学生のすばらしい人間性に触れることで引き出されたコミュニケーション能力など、スキルアップを生徒は実感していました。

現在は合宿で見た課題に取り組み、十一月の発表に向けてTAの方とまとめていく作業をしています。同窓会の多大なるご配慮、そして竜一先生としての期待に応えられるよう、最終発表に向け邁進していききたいと思います。

(西元 重雄)



応援団旗贈呈

七月四日、本校体育館に於いて、厳粛な雰囲気の中、応援団旗贈呈式が行われました。齋藤佳郎同窓会長より、目録が応援団に贈呈され、全校生徒に応援団旗が披露されました。団旗は大旗一竿と小旗二竿で、校章が大きくデザインされています。団長の渡辺未来(3A)は感謝の気持ちを込めて、全校生徒の前でエールを送りました。竜ヶ崎一高応援団に新たな伝統が刻まれた式となりました。今後の野球応援、壮行会など様々な機会に応援団旗を掲げていきたいと思ひます。ご寄贈くださいました白幡同窓会に感謝申し上げます。

(齊藤 健太)



「まいりゅう」君のご紹介

龍ヶ崎市のマスコットキャラクターとして、すっかりお馴染みとなった「まいりゅう」君は、三年生の杉田玲奈さんによってデザインされたものです。龍ヶ崎市が公募し、応募総数二五九点の中から市民によるキャラクター総選挙の結果などで選ばれました。「まいりゅう」は、龍ヶ崎市の伝統芸能「撞舞」をモチーフにしたもので、子供の龍が踊りの修行を続けている姿を描いたものです。特にハート形に描かれた鼻は、地域のふれあいを表していて、とてもかわいらしい姿です。

今年の白龍祭(文化祭)には、着ぐるみの「まいりゅう」君が登場し、大いに盛り上げ

てくれました。生徒だけでなく、多くの来校者達と握手をしたり、写真を撮ったりと大忙しでした。そして、待望のまいりゅうママとの再会も実現し、とても楽しい様子がホームページにも掲載されています。

全国的なゆるキャラブームの中、竜一先生が考案したマスコットキャラクターが多くの人目に触れ、かわいがられることは、龍ヶ崎市のイメージアップだけでなく、本校生の広い分野での活躍が認められる機会でもあります。「まいりゅう」君が、本校同様に長く地域の方々に愛されるキャラクターに成長してくれることを心より祈ります。

(矢口 博)



先輩の語る仕事を聴く会

平成二十五年十一月二日、第一学年では、人生の先輩十二名の方をお招きしてご講演をいただきました。このうち同窓生十名の方の、講演後の感想を紹介致します。

「法律の勉強を通して学んだこと・考えたこと」
有川 保氏(高33回)
弁護士(民事系破産、債務処理・刑事系窃盗、詐欺など)「感想」準備していた話を十分にできず、生徒さんに申し訳なかったと思います。司法試験の制度や裁判のやり方の話をしなくてもよかったのではないかと反省しています。最近ではドラマでも弁護士の仕事が多くなっているの、別の話をしようと思って準備したのですが、生徒さんの聴く姿勢は模擬試験で疲れていたにもかかわらずとても良く、好感が持てました。

「コミュニケーション豊かに、やりがいのある仕事を」
窪庭 美佐子氏(高40回)
キャノン化成(株) 人事部 岩間総務課 課長「感想」生徒さんの印象は非常に良かったです。実際に聞いていた自分かと思ひます。まだ自分のキャリア形成や、更に目指す仕事という事を自分のものとして具体的に考え

ることは、機会が少ないと思
います。視野を広げる、様々
な年代の人とふれ、今一度自
身の親御さんが一番身近に
働く先輩なのであるというこ
とを振り返り、更にはまだま
だ大きな理想・夢を描いて前
を向ける一歩となっていただ
ければと思います。今回は自
分も仕事をする企業人として、
いろいろなことを考える良い
機会にもなりました。ありが
とうございました。

「地域のために」

「地方銀行員の仕事」

佐々木 隆氏（高41回）
筑波銀行人事部厚生グループ
福利厚生業務全般を担当
「感想」 本日は貴重な場をい
ただきありがとうございます。
一年生でこれから高校生
活をもっと楽しんでいこうと
いう時期にだけ「職業」
「仕事」というものを伝えら
れるのが難しかったのですが、
熱心に耳を傾けていただきと
てもありがたかったです。
地方銀行員としてのやりがい
や心構えをおまかに話させ
ていただきましたが、少しで
も興味を持っていただけたら
幸いです。より詳しい話が聞
きたいと言ったことがあれば、
できる限り協力したいと思
います。OBとして母校にご
協力させていただく機会を与
えていただきありがとうございます。
私にとっても貴重な
体験となりました。

「人を動かす言葉」

野澤 幸司（高49回）
博報堂 コピライター
（広告製作）多摩美術大特別
講師
「感想」 高校一年生にはもし
かすると難しい、分かりにく
い内容だったと思います。そ
れでも、まっすぐな目で聞い

てくれる年の離れた後輩たち
を見て、この高校の卒業生で
よかったと思いました。二十
年近く昔とはちがう形で、ま
た竜一に何か大切なものを教
えてもらったと感じています。
ありがたうございました。ま
た実家に帰るような気持ちで
遊びに来たいと思います。

「社会人として仕事をすると
言うこと」

松井 邦彦（高49回）

（株）日立製作所 社会イノ
ベーション・プロジェクト本
部 物流技術管理士
「感想」 高校一年生に話をす
るということで、何を話せば
興味を持ってもらえるか非常
に悩みました。かみ砕いて話
したつもりですが、実際に理
解してもらえたかは（？）です。
一九九七年卒ですが、私が竜
一生だったころはこの企画が
なかったのだ、今の学生は幸
せだと思えます。学生からの
質問が少なかったのは残念で
した。講師側からすると、何
を期待しているか分からない
ので、もう少し活発な意見が
欲しかったのです。十名くら
いでディスカッション形式の方
が面白いかも知れません。今
後ともよろしく願います。

「リハビリは楽しく、笑顔で」

齋藤 友美（高56回）

牛久愛和総合病院（リハビリ
センター）理学療法士
「感想」 四十五分は意外と短
いと感じました。興味のある
なしによって生徒たちの反応
も違うのかなと思います。高
一の時点で、実際の職業の話
を聞くのはなかなかできない
機会だと思えます。自分が高
一の頃、将来のことをどれだ
け考えていたかと再確認しま
した。生徒たちに私の仕事の
ことが少しでも伝わり、医療



「理系の研究職の仕事の内容
は」

若林 康介（高59回）

アステラス製薬（株）原薬技
術開発担当
「感想」 本日は大変貴重な機
会に参加させて頂きありがと
うございました。薬学部志望
の生徒が多いのだと感じま
した。私が在学していた頃と
は違って理系が四クラスある
と聞いて驚きました。講演を
して見て、生徒が興味を持っ
ていたのは仕事内容よりは大
学院の研究内容なのかなと思

いました。そこから、自分の
知らない事に触れる事を楽し
める生徒たちなのだなと思
いました。だからこそ、この様
な色々な職業の人達の話を聞
ける体験は貴重で大切にして
欲しいと思いました。これか
ら頑張つて欲しいです。今
日はありがとうございました。

「仕事を始める前に、今考え
るべきこと、行動すべきこと」

山内 浩史（高59回）

東日本旅客鉄道（株）東京支
社 鉄道通信設備保守点検
「感想」 本日はお招き頂きあ
りがとうございました。久々
の母校で、しかも講演という
大変光栄な役を頂き、どのよ
うな講演にすれば良いかと不
安に感じておりましたが、生
徒の皆さまがしっかりと聞いて
くれて安堵しております。私
自身、高校生の時には進路や
職業などのことを考えておら
ず、今思えば反省が多い高校
生活でした。そのときの失敗
や学んだことを伝えることが
でき、非常に嬉しく感じてお
ります。生徒の皆さまが望む
職に就き、素晴らしい人生の
スタートを切れることを祈っ
ております。

「感謝の心を持って」

近藤 真徳（高59回）

守徳寺副住職 曹洞宗宗務庁
「感想」 本日は貴重な体験を
させて頂きました。ありがとうございます。
一言、二言でも心に響くよ
うなお話ができればと思っ
て参りましたが、皆の反応が予
想以上に良かったので、大変
嬉しかったです。中々母校に
恩返しができるかと思ってい
た中、本日の大役でしたので、
少しだけですがそれが叶って
良かったです。また来年以降
もご用命がありましたら、お

「ホットヨガを通してココロ
と体の健康と幸せを」

中村 菜摘（高59回）

（株）ベンチャーバンク
竹ノ塚店店長 ホットヨガイ
ンストラクター
「感想」 最初は少し緊張しま
したが、学生の皆が素直に話
を良く聞いてくれたのでとて
も話しやすい雰囲気の中で助かり
ました。途中でヨガのプチ体
験を行ったら、色々なリア
クションを見せてくれたので、学
生の皆緊張もほぐせて良かつ
たと思います。社会人三年目
のまだまだ経験の浅い私の話
でも、少しでも皆の今後の役
に立てたら、良い影響を与え
られたら嬉しいです。就職に
対してポジティブに捉えて、
自分の楽しめる職業を探して
もらえればなあと思います。
今日は私にとっても自分の仕
事に対して振り返る良い機会
となりました。本当にありが
とうございました。

「寄贈本のお願い」

図書館には本校
卒業生による著作
があります。多士
済々の同窓生の著
作をこれまで以上
に積極的に蒐集し、
在校生に紹介して
いきたいと思いま
す。

詳しくは、事務
局にお問い合わせ
ください。

部活動状況

陸上競技部

日頃の練習成果を発揮
五月に行われた県大会では
七名の選手が埼玉県熊谷市で
行われた関東大会への出場権
を獲得しました。関東大会に
出場した選手は小倉智哉（三
〇〇m障害）、唯根拓己（四〇
〇m）、稲本拓也（走幅跳）、
後藤晴菜（走幅跳）、上野航
（円盤投）、豊増隆之（やり投）、
宮本浩行（やり投）で、全て三
年生です。残念ながらインター
ハイへ出場する選手は出なかつ
たものの、自己ベストを出す
選手が出たり、日頃の練習の
成果をよく発揮していました。
また、九月には新人戦が行
われ、新体制となった陸上競
技部で初の大きな大会でした。
夏の厳しい練習の成果がよく
出ていて、多くの選手が自己
ベストを出すことができました。
その中で、十月に神奈川県
県相模原市で行われる関東新
人大大会の出場権を獲得したの
は二年の坪井彩夏（四〇〇m）
です。関東ブロックは全国で
もレベルの高い地区ですが、
頑張ってもらいたいと思いま
す。



柔道部

男子団体ベスト4進出

五月九日に関東大会県予選
（男子団体戦）が行われまし
た。二回戦までは順当に勝ち
進み、三回戦の明野戦、準々
決勝の八千代戦は激闘の末、
接戦を制し、ベスト4進出。
三十回目の関東大会出場を果
たしました。

第六十一回関東高等学校柔
道大会は山梨県小瀬スポーツ
公園の武道館で行われました。
出場メンバーは先鋒：市田慶
吾（三年）、次鋒：杉内佑輔
（三年）、中堅：斉藤悠太郎
（二年）、副将：永吉航（三
年）、大将：安藤拓哉（二年）。
二回戦からは中堅に齋藤巧真
（二年）が出場。
一回戦の相手は栃木県の県
立大田原高校。関東という大
舞台でも臆することなく、自
分の実力を発揮し、5-10で



さるOBの方々、合宿のた
びに協力してくださった保
護者並びに同窓会の皆様に、
この場を借りて御礼申し上げ
ます。
（顧問 齊藤 健太）

男子ソフトテニス部

関東大会・東京国体出場

六月一日、神奈川県小田原市で開催された関東大会男子個人の部に、井上源太(2G)・奥村健太郎(2A)ペアが出場しました。

初戦は、丹沢・保坂ペア(山梨・増穂商業高校)と対戦し、④対①で圧勝し、続く三回戦は、林・白瀬ペア(埼玉・本庄東高校)と対戦し、ゲームの序盤は相手の打球力にやや手古摺るも、ゲーム中盤から終盤を優位に進め、④対①で勝利した。4回戦は、石下・和知ペア(千葉・木更津総合高校)と対戦し敗退しました。関東ベスト32という素晴らしい結果でした。

十月四日・五日に、東京世

田谷区にて行われた東京国体に奥村健太郎(2A)が県代表として出場しました。上位進出有力候補の大府府を、彼の活躍もあり撃破して、全国4位に入賞することができました。

男子ソフトテニス部は、先の新人県大会で団体ベスト8に入り、六年ぶり6度目の県インドア大会に出場し、関東インドア大会初出場を目指し練習に励んでいます。

最後になりましたが、生徒の活動を支援してくださる白幡同窓会、OB・OGの皆様にお礼申し上げます。

(顧問 高野 健二)



バレーボール部

八年ぶり五度目の関東大会出場

五月十日、十二日に関東大会茨城県予選会が行われ、八年ぶり五度目の関東大会出場を果たしました。関東大会出場までの道のりは決して楽ではなく、代表決定戦の準決勝では水戸啓明高校とフルセットの試合でした。第一セット24-26、第二セット25-22、第三セット26-24で、一セット目を取られてからの逆転に次ぐ逆転、第三セットまでデュースという本場に苦しく、どちらが勝ってもおかしくない試合でした。最後の一点は啓明のエースのスパイクをキャプテン大矢がブロックし、関東大会出場が決まりました。

また、第六十七回関東高等学校男子バレーボール大会は六月一日、二日に埼玉県深谷市、行田市で行われました。初戦は全国大会常連校、東京代表の東洋高校との対戦でし



た。序盤は大会空気に飲まれたせいか、連続失点もありましたが徐々に竜らしいバレーをすることができました。第一セット16-25、第二セット14-25という結果で関東大会を終えました。負けてしまったものの、全国優勝の経験があるトップクラスのチームとの試合で通用したバレーへの自信は、大きな財産となったと思います。関東大会出場を今年で終わらせることなく、この先にも繋げていきたいと思っています。

最後になりますが、バレーボール部の活動のために支援してくださっている同窓会、先生方、保護者、OBの皆様御礼申し上げます。

(マネージャー 諸橋 美月)

ライフル射撃部

第68回国民体育大会

竹澤 隼(3A) 少年男子ビームライフル立射 個人優勝

今年八月に実施された全国高等学校選手権大会は、男子、女子とも本来の力を出し切ることができず、不本意な結果に終わった。特に、三月に行われた全国選抜大会において優勝し、連覇を目指していた竹澤隼(3A)にとつては、高校生最後の大会となる国民体育大会は雪辱を期す絶好の機会であった。十月五日(土)に埼玉県長瀨総合射撃場で行われた本大会において、竹澤は卓越した技術と並外れた集中力をいかんなく発揮し、209・4点の大会新記録でビームライフル少年男子優勝という快挙をなしとげた。三年生になり、責任感と周囲からの期待をプレッシャーに感じていたが、地道に忍耐強く努力し続けた結果、有終の美を飾ることができた。竹澤は本校射撃部初の2度全国大会を制した選手となった。現在部活動の方は一、二年生が主体となり、栄光をつかんだ先輩を目標に日々精進を重ねている。

この結果は、学校・同窓会をはじめ、PTA、OB、OGの方々のご支援であると感謝しております。本当にありがとうございました。

(顧問 菅原 冬樹)



書道部

長崎しおかぜ総文祭に参加して

長崎県佐世保市で開催された第三七回長崎しおかぜ総文祭に、七月三十一日から三日間、和田朋恵(2E)さんと参加してきました。

全国代表三三三点(茨城県は十占)の作品が佐世保市文化館に展示。現時点での各県の高校書道事情が明白に出ていて壮観そのものでした。

和田さんは、野口雨情の「あの町この町」(写真)を出品。清らかな感じの秀作でした。来賓の齋藤克美先生に、「言葉を大切にし、平面構成や書体を工夫した詩情豊かな作品。余白の生きた快作」と批評をいただき、指導者としても手応えを感じ意義ある大会となりました。

八月一日の午前中、全国から参加の生徒たちが顧問の教師と熱心に鑑賞していた光景は、心温まるものがありました。また、茨城から参加の皆



棋道部

第三十七回全国高等学校総合文化祭将棋部門兼第四十九回全国高等学校将棋選手権大会

今年度は、これまで個人戦では何度も全国大会に出場してきましたが、創部以来初めて男子団体戦で全国大会に出場することができました。

今年度の全国高総文祭は長崎県時津町で七月三十一日～八月一日に開催されました。本校は先鋒・辻悠久(三年)、中堅・柳沼大輝(三年)、大将・辻聡智(二年)の三名が出場しました。

予選第一回戦は弘前高校(青森)でした。先鋒・辻(三年)と大将・辻(三年)が勝ち、2対1で勝利することができました。第二回戦の金沢泉丘高校(石川)、第三回戦の西大和学園高校(奈良)、第四回戦の伊那北高校(長野)には惜敗し、予選結果一勝三敗で決勝トーナメントに進出することはできませんでした。

大会結果を見ると、二勝二敗でもベスト一六に入っていました。対戦を省みますと、勝てるはずの対局を落としている局面もあったことから、今後は精進して確実に勝ち切る力をつけ、上位進出を目指していきたいと思っています。

最後になりましたが、日頃より生徒の活動を支援して下さいます同窓会の皆様、ご指導下さっている保護者の方々、OBの方々、先生方に感謝申し上げます。

(吉田 真弘)



校内幹事の異動

平成二十五年三月末、四月始めの教職員人事で次のような校内幹事の異動がありました。

- | | | |
|----|----------------|------------|
| 転出 | 川口 浩己(定教頭・高29) | 牛久米進高校へ |
| | 栗山 貴浩(保体・高42) | 教育研修センターへ |
| | 藤田あかね(事務・高46) | 伊奈特別支援学校へ |
| 転入 | 塚原 勇(地公・高28) | 江戸崎総合高校から |
| | 室津 彰信(国・高48) | 神栖高校から |
| | 飯田 栄(英・高17) | つくば国際大高校から |
| | 坂本 秀樹(英・高31) | 古河第三高校から |
| | 中村 文司(保体・高20) | 土浦第三高校から |

定時制に思うこと

定時制教頭 君山 弘

白幡同窓会の皆様には、定時制の教育活動にご支援を賜りまして、ありがとうございます。定時制教職員一同より感謝申し上げます。

また、前後の全校集会では壮行会・報告会を行いました。級友の活躍は他の生徒にも励みになり、母校への愛校心や帰属意識が向上したと感じています。

最後に、この素晴らしい体験を通して、目標が見つからない生徒に対して、寄り添って、一緒に考えるといった指導観を再確認することができました。今後は、その事を胸に刻み、定時制の生徒諸君と共に頑張りたいと思います。

県大会から全国大会までの練習では、平尾先生の指導のもと、仕事やアルバイトを調整し、練習時間を確保しました。また、少ない人数ながら練習内容を工夫するなど、キャプテンの柴崎裕太君を中心に、田沼智也君、八代達也君が補佐役となり、全員で努力しました。

全国大会は残念ながら初戦で惨敗しましたが、胸を張れる試合内容でありました。今回、私が、普段の練習を見学し、引率に加わって1泊2日を共にして感じたことがあります。サッカー部全員に言えることですが、移動や宿舎では規律を守り生活する。試合ではチームメイトに適切なアドバイスをする。苦しい時でも頑張りをながら他人を励ます。といった普段の学校生活とは違った一面を見ることができたことです。これは、「全国大会出場」、「一回戦突破」といった目標が明確になり、何を何処でいつ頑張るなどの努力の道筋が見えたことで、素晴らしい力を発揮することに繋がったのだと思います。

全国定時制サッカー大会

平成二十五年度全国高等学校定時制通信制体育大会第二十三回サッカー大会に本校定時制サッカー部が参加しました。

過去においては、平成八年度、平成十四年度に参加していますので、十一年ぶり三度目の参加となります。定時制での運動部は、六月に行われる茨城県定通大会を目標に活動します。この定通大会は、各種目全国大会につながる大会で、サッカー部も全大会出場を目指し、練習してきました。

県高等学校定通制体育大会

平成二十五年度第五十二回茨城県高等学校定時制通信制体育大会が六月に開催されました。

入賞者

優勝

柴崎 裕太 田沼 智也
張替 佑樹 岩本 佑介
寺田 翼 木村 良太
佐藤 祐希 八代 達也
生田 武志 町田 洋輔
櫻井 将生

第3位

熊谷 直也
山口 伸也・茂木 哲組
大越 哲也・伊藤 歩組

グセセンターです。ちなみに決勝戦は、清水エスパルスのホームグラウンドであるIAIスタジアム日本平です。

初戦は八月三日（土）に、大阪市立中央（大阪一位）と対戦しました。前半に本校の柴崎選手のフリーキックにより先制し、序盤のペースを握るが、都合により人数が足りないまま出場したこともあり、次第に運動量が落ち、徐々に相手にペースを握られ、惜しくも1対3で敗退しました。

夏休み中も、仕事の合間をぬって、夜遅くまで練習してきましたが、残念ながら敗退してしまいました。

しかし、参加した選手は地域を越え、同年代の選手と交流したり、すばらしいグラウンドを維持する人々の思いに触れたりするなかで、リスベクト（大切に思うこと）の気持ちを実感できたことと思います。この体験を実生活で活かし、地域社会に貢献できる人材になってくれることを期待します。

（顧問 平尾 智靖）



白龍祭「てーじ庵」

毎年、白龍祭では定時制としてカレーショップ「てーじ庵」を出店しています。

今年も、定時制生徒会役員九名と有志スタッフ十名の計十九名で運営しました。調理のアドバイザーとしての給食室関係職員の力も借りながら、今年も、子どもから大人までおいしく食べたいだけという、国産材料にこだわり、チキンカレーを提供しました。おかげさまで、289食完売しました。

「てーじ庵」の歴史は古く今から十七年前の平成八年から実施されています。当時、数名の生徒から定時制も白龍祭に出店したいという声があがり定時制の職員有志が協力して、「てーじ庵」がはじまりました。過去においては、甘口、辛口を用いたり、ゆで卵や龍ヶ崎コロッケをトッピングしたり、カレーとスープをセットにしてみたりと、工夫を凝らしながら出店してきました。ポリュームもあり、食べればお腹いっぱいになります。また、毎年、ありがたいことに、毎年、「てーじ庵」のカレーを楽しむにしてくれているリピーターも多くいます。

お店の看板も手作りです。また、木彫りのものや龍の模型をあしらったものなど、先輩が作成した温かみのある作品も大切に活用しています。

今後定時制生徒会スタッフと有志メンバーが中心となって運営していく予定です。次年度も「てーじ庵」を

継続させ、定時制からも白龍祭を盛り上げていきます。また、「てーじ庵」のカレーを食べたことのない人もどんどん食べに来てください。スタッフ一同、心よりお待ちしております。

（生徒会担当 平尾 智靖）



生活体験発表会



平成二十五年度茨城県高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会が、十月五日（土）に県立水戸南高等学校で開催されました。これは昭和二十九年から行われ、今年で六十一回を数える全国大会の茨城県代表者を選出する大会です。今年の参加校は十六校、

発表生徒は二十一名でした。定時制や通信制に学んでいる生徒の発表ということで、参加者の年齢は十代から六十代までと幅広く、発表の内容も様々でした。しかし、生きていく中で困難に直面し、挫折や失敗を経験しながらも何とかそれを乗り越えて進んでいく前向きな気持ちは、どの発表からも感じ取ることができました。

この大会は、発表内容や態度に対して評価がなされ、審査の結果代表者が選ばれる場です。しかし同時に、参加者が自分の体験を語るとともに他者の発表を聞くことにより励まし合い、皆がお互いの勇気をもらう場にもなっているように感じられました。

本校からは四年生の五十嵐凱さんが代表として参加しました。五十嵐さんは「自分の生き方」という演題で発表を行いました。美術の学べる学校への進学がかなわず、入学した定時制高校での学校生活はあまり納得のできるものではありませんでした。

しかし一年の夏休み「声優」という仕事に興味を持ってから自分に大きな変化が訪れます。五十嵐さんは、高校に通いながらアルバイトを掛け持ちし、東京にある声優養成所で勉強するという忙しさの中、今までにない充実した気持ちを感じたことを自分の言葉で語ることができました。

そして養成所で学んだ経験を通して、絵画だけではなく、自分を表現する手段には様々な方法があることに気づいてゆきます。自分の進むべき方向性をつかんでいった経緯が力強い言葉で表現できている、聴衆の気持ちを引きつける発表になりました。その結果、見事水戸市教育

委員会教育長賞を受賞することができました。ご支援いただいた同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。（市川 貴）

事務局から

協力金をお願い

部活動や学校行事等への援助をはじめ、会報発行や同窓会活動の活性化など、同窓会の事業運営などにつきまして、今後とも同窓生の皆様から全面的な支援をいただきたく存じます。

つきましては、今年度も「協力金」として千円のご支援を賜りたくお願いする次第です。

総会の案内

平成二十六年四月五日（土）十二時三十分、十四時三十分
場所 本校体育館

懇親会の案内

同日 十五時～十七時
場所 アラデン（平尾 智靖 会費 五、〇〇〇円）
同窓生の多数の参加をお待ちしています。

寄付金に感謝

次の方々から白幡同窓会に寄付がありました。心から感謝申し上げます。

- ・高13回卒同窓会
- ・高31回卒同窓会